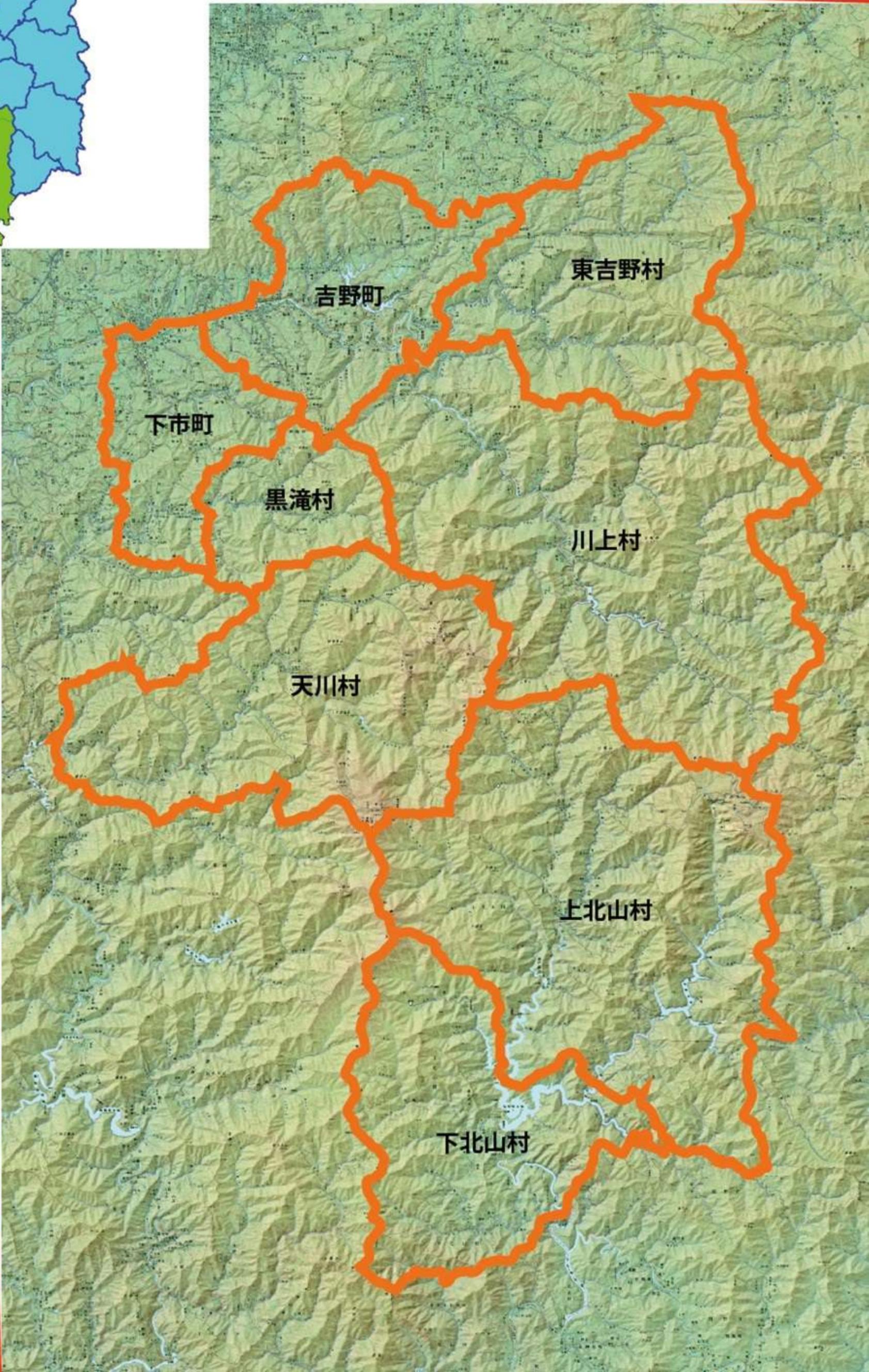
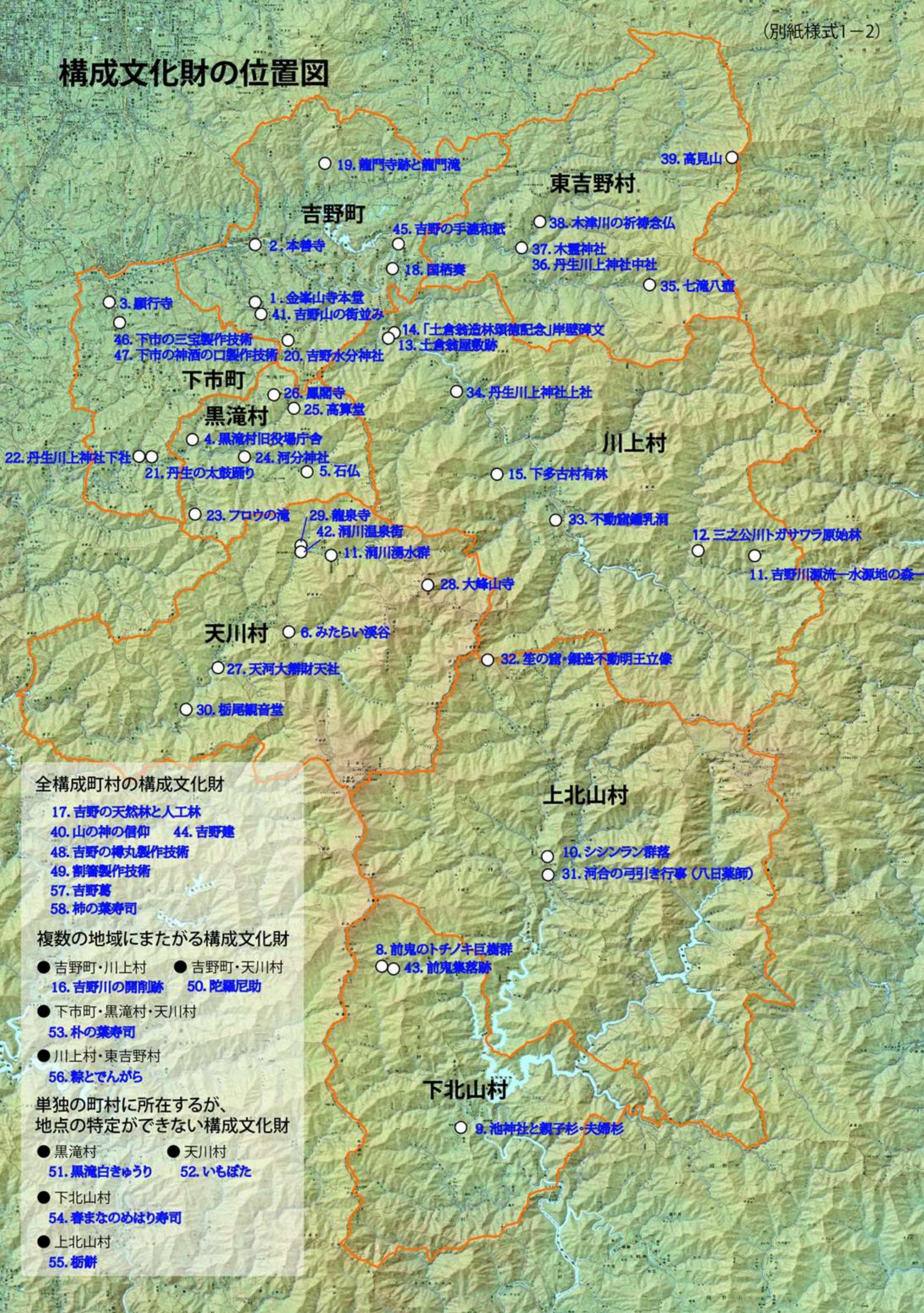


① 申請者	◎吉野町、下市町、黒滝村、天川村、下北山村、上北山村、川上村、東吉野村	② タイプ	地域型 / シリアル型 A B C D E
③ タイトル			
<p style="text-align: center;">森に生まれ、森を育んだ人々の暮らしとところ ～美林連なる造林発祥の地“吉野”～</p>			
④ ストーリーの概要（200字程度）			
<p>我が国造林発祥の地である奈良県吉野地域には、約500年にわたり培われた造林技術により育まれた重厚な深緑の絨毯の如き日本一の人工の森と、森に暮らす人々が神仏坐す地として守り続ける野趣溢れる天然の森が、訪れる人々を圧倒する景観で迎えてくれる。</p> <p>ここに暮らす人々が、それらの森を長きに亘って育み、育まれる中で作り上げた食や暮らしの文化が今に伝わり、訪れる者はそれを体感して楽しむことができる。</p>			

奈良県



構成文化財の位置図



全構成町村の構成文化財

- 17. 吉野の天然林と人工林
- 40. 山の神の信仰
- 44. 吉野建
- 48. 吉野の樽丸製作技術
- 49. 割箸製作技術
- 57. 吉野葛
- 58. 柿の葉寿司

複数の地域にまたがる構成文化財

- 吉野町・川上村
- 吉野町・天川村
- 16. 吉野川の開削跡
- 50. 陀羅尼助
- 下市町・黒滝村・天川村
- 53. 柿の葉寿司
- 川上村・東吉野村
- 56. 粽とでんがら

単独の町村に所在するが、地点の特定ができない構成文化財

- 黒滝村
- 天川村
- 51. 黒滝白きゅうり
- 52. いもぼた
- 下北山村
- 54. 春まなのめはり寿司
- 上北山村
- 55. 栞餅

19. 龍門寺跡と龍門滝

39. 高見山

東吉野村

吉野町

45. 吉野の手漉和紙

38. 木津川の祈禱念仏

2. 本善寺

37. 木霊神社

36. 丹生川上神社中社

18. 国栖妻

35. 七滝八壺

3. 願行寺

1. 金峯山寺本堂

41. 吉野山の街並み

14. 「土倉翁造林頌徳記念」岸壁碑文

46. 下市の三宝製作技術

47. 下市の神酒の口製作技術

20. 吉野水分神社

13. 土倉翁屋敷跡

下市町

26. 鳳閣寺

34. 丹生川上神社上社

黒滝村

25. 高算堂

川上村

22. 丹生川上神社下社

4. 黒滝村旧役場庁舎

24. 河分神社

21. 丹生の太鼓踊り

5. 石仏

15. 下多古村有林

23. フロウの滝

29. 龍泉寺

42. 洞川温泉街

11. 洞川湧水群

33. 不動窟鍾乳洞

12. 三之公川トガサワラ原始林

11. 吉野川源流一水源地の森

28. 大峰山寺

天川村

6. みたらい溪谷

32. 釜の窟・銅造不動明王立像

27. 天河大辨財天社

30. 栞尾観音堂

上北山村

10. シシラン群落

31. 河合の弓引き行事(八日薬師)

8. 前鬼のトチノキ巨樹群

43. 前鬼集落跡

下北山村

9. 池神社と親子杉・夫婦杉

ストーリー

◆天然の森から人工の森へ

奈良県南部の吉野地域に古代から広がっていた豊かな天然の森は、我が国屈指の多雨地帯であり、湿潤であるために多様な植物が密生していた。それ故に、そこで育つ木々が太径になるには他の地域より時間を要して、細やかな年輪と強靱な性質を持っていた。中世までは、そのような森の木を伐採することは、山や森に坐す神仏を祭祀する金峯山寺(きんぷせんじ)などの寺社を造営する必要に迫られた時に限られ、伐採しても自然の回復を待つことが常であった。

戦国期に至って、この地域の森と暮らしに大きな変化が訪れた。近畿各地で城郭や寺社の建築が増え、その用材として吉野の森林資源が注目されるようになった。それを効率的に運び出すために、蛇行する河川の岸壁を開削することで河川の流路改修が進められた。その結果、吉野の天然林は次々と伐採され、筏に組まれて運び出されていった。

このような流れの中で、伐採可能な天然林が徐々に減少したため、需要に応えるためには植林の必要に迫られるようになり、天然林が伐採されたあとに、建築材としてより価値の高い杉や桧が植えられるようになった。室町後期、川上村で初めて植林が行われたことが最古の記録であり、現に樹齢約400年の植林の森が川上村下多古(しもたこ)地区にある。

江戸中期になると、江戸などの大都市で灘や伊丹の酒の需要が高まり、その輸送用の樽の材料として吉野地方の木材の需要が増え、海上輸送をはじめとする長期の輸送にも耐えるよう更に品質を上げるために、植林、育林方法に工夫がなされるようになった。植林は、他の地域では1ha当たり3千本から4千本の植え付けが一般的だが、吉野地域では1ha当たり1万本の苗を植え付ける「密植(みつしょく)」という方法がとられた。その後は、「多間伐(たかんぼつ)」という方法がとられ、成長が悪い木を除伐しながら、木の生長に合わせて間伐を何度も繰り返す作業を行う。そして、一般的には40年から50年とされている最終伐期を、吉野では80年から100年以上に引き延ばす「長伐期(ちやうぼつき)」施業という独自の技術を創造した。その結果、木の外回りが真ん丸に近い真円で、まっすぐに育った木々は年輪幅がほぼ一定で密であるために強度が強く、色艶や香りの良い、どの地域の材よりも美しい杉桧の「吉野材」を生み出すこととなった。この優れた林業技術によって、この地域の山々には、等間隔に、且つ真っ直ぐに立ち並ぶ見事な人工の美林が作りあげられることとなった。

◆森に生きた人々のこころの証

しかし、吉野の人々は全ての山々を人工林に変えることはしなかった。人々は、山々を神仏と仰ぎ、その頂は神仏の頭であり、稜線伝いの道は神仏を巡る修行の道として、その周辺の天然の森には手を着けることなく守り続けた。古代から人々は、神仏と仰ぐ森や山、そこから流れ出る水などの依り代として祠を設けて祀った。中には、平安時代以降、皇室や撰閲家など貴頭の尊崇を受け



金峯山寺本堂



下多古村有林



吉野の天然林と人工林



山の神の信仰

ることとなった吉野水分神社(よしのみくまりじんじや)や丹生川上神社(にうかわかみじんじや)、金峯山寺などように豪壮な寺社に発展したところもある。

また、人工林は、山の暮らしに富をもたらしてくれる有難い存在として、人々は山の神と仰ぎ、ささやかな祠を設けて、今もその祭事が各所で執り行われている。

◆森の資源を活かした生活文化

吉野地方の多くは、急峻な地形が多く、宅地や田畑となる平地や緩斜面は極めて少なく、それ故に、石垣を積んで宅地や田畑を造り、あるいはまた、谷側を背にして斜面に張り付くような「吉野建(よしの建て)」と呼ばれる建築様式が形成された。

吉野町や下市町を除く村部には大規模な集落は少なく、緩斜面を削平した宅地に建つ民家や吉野建の民家が集まる小集落が谷間や山の中腹に点在し、大抵は山仕事を生業としてきた。しかし、中には山や森などを神仏と仰ぐ修験者が修行する前進基地として、その山の入り口に当たる稜線伝いの吉野町吉野山地区や、河川伝いの狭隘な地域である天川村洞川(どろがわ)地区のように旅館や山修行の手伝いを生業とする民家が混在する集落も形成された。

これらの集落での生活に必要な道具は、自ずと森の木々を利用した物が多い。下市町の三宝(さんぼう)などに代表される曲物(まげもの)が室町中期から作られたほか、江戸中期からは全国に先駆けて、黒滝村などでは樽丸(たるまる)という樽の側板材が盛んに生産され、全国生産量の殆どを明治期に至るまで吉野地方が担っていた。明治初期からは、樽丸生産や製材の過程で出る端材を利用した割箸作りが下市町で考案され、吉野町や下市町などで割箸が盛んに生産されるようになり、これもまた全国生産量の殆どを担っていた。

傾斜地や谷間に暮らすこの地域の人々は、米作に適さない土地柄であるが故に、森の恵みに食材を求め、あるいは環境に合う作物や加工食品をつくり、食生活を充実してきた。また、保存効果や殺菌効果が高いとされる柿や朴(ほう)の葉などを利用した寿司を作る文化が形成されて、吉野川に沿った地域では柿の葉寿司、黒滝村・天川村・下市町などでは朴の葉寿司が今に伝わっている。下北山村や上北山村などは栃餅に代表される森の恵みに栄養源を求めることもあった。また、吉野地域で生産された葛は、「吉野葛」として料理に利用されるほか、葛湯、葛餅、葛菓子、葛きりなどの材料として全国にその名が知られる。

造林発祥の地“吉野”で車を走らせれば、人工の常緑の森が、重厚で一糸乱れぬ装いで広がるかと思えば、天然の森の色形ともに変化に富む景観が現れる。この地域の二つの壮大な美林連なる景観の中で、人々はその造林技術と育み育まれた森への祈りを今に伝え、訪れる者はその森とともに暮らす生活を実感することができる。



吉野建



吉野の樽丸製作技術



柿の葉寿司

ストーリーの構成文化財一覧表

番号	文化財の名称 (※1)	指定等の状況 (※2)	ストーリーの中の位置づけ (※3)	文化財の所在地 (※4)
1	金峯山寺本堂(きんぷせんじほんどう)	国宝 (建造物)	修験道の根本道場であり、幾度かの被災に際しても吉野の山地で育った材木が利用された。堂内の梨・躑躅(つづじ)の名木と伝える天然木の柱群は、吉野の天然林資源の豊かさの象徴である。	吉野町
2	本善寺(ほんぜんじ)	国登録 (建造物)	真宗教団が吉野町飯貝(いいがい)に建立した寺院。 真宗教団は、石山本願寺(いしやまほんがんじ)等の大寺院建立の建築材として吉野の材木を利用するため、吉野の森林資源の搬出の拠点であった当地に本善寺を建立した。真宗教団が開発した筏の流下ルートが、江戸時代の吉野材搬出のルートの原型となった。	吉野町
3	願行寺(がんぎょうじ)	町指定 (建造物)	下市御坊(しもいちごぼう)と呼ばれた真宗寺院で、室町時代には、吉野林業の担い手であった柚人(そまびと)たちの心の拠り所であり、同寺の周辺には木材加工技術を持った人々が集住した。	下市町
4	黒滝村旧役場庁舎(くろたきむらきゅうやくばちやうしゃ)	県指定 (建造物)	明治末、黒滝郷材木組合(くろたきごうざいもくくみあい)の事務所として建てられた洋風木造建築。当時の林業家たちの活動の場を知る上で貴重な建造物。現在は、樽丸(たるまる)づくりの道具(県指定)が展示され、庭には和歌山市にあった黒滝材の貯木場の記念碑が移設されている。	黒滝村
5	石仏(いしぼとけ)	未指定	黒滝川を流下する木材は、ここで筏に組み上げられた。付近に、水の安全を祈ったという石仏が祀られ、山で暮らす人々の素朴な信仰を見ることができる。	黒滝村
6	みたらい溪谷	未指定	みたらい溪谷は、山上川(さんじょうがわ)が川迫川(こうせがわ)に合流する場所に位置し、特に狭まった山の裾の大岩壁を大小の滝が流れ落ちる吉野に残された代表的な自然景観である。	天川村
7	洞川湧水群(どろがわゆうすいぐん)	未指定	洞川湧水群は、ごろごろ水・泉の森・神泉洞(しんせんどう)という3つの湧水からなり、花崗岩と石灰岩の地層から湧き出る湧水は、適度なミネラル分を含み、修験者や山で暮らす人々にとって今も	天川村

			無くてはならない水源となっている。	
8	前鬼 <small>(ぜんき)</small> のトチノキ巨樹群	県天然記念物	前鬼宿坊 <small>(しゆくぼう)</small> から太古の辻 <small>(たいこのつじ)</small> 方面へ少し登った所に、トチの巨木があり、中には幹回り 10m を超すものもある。このトチの木の実は栃餅 <small>(とちもち)</small> の材料として重宝され、山里の伝統食として今も受け継がれている。	下北山村
9	池神社 <small>(いけじんじや)</small> と親子杉 <small>(おやこすぎ)</small> ・夫婦杉 <small>(めおとすぎ)</small>	村天然記念物	村内で一番高所にある池峰 <small>(いけみね)</small> 集落に役行者 <small>(えんのぎょうじや)</small> が開いたとする池神社がある。この神社は、正面にある明神池 <small>(みょうじんいけ)</small> をご神体とし、親子杉・夫婦杉などの杉の大木に囲まれた場所は、山で暮らした人々の信仰の形を今に伝えている。	下北山村
10	シンラン群落	国天然記念物	シンランは、本州南部暖地産の着生常緑植物でツクバネ檜に着生するイワタバコ科の植物。7 月頃に直径 3 c m 程の可憐な白い花を咲かせ、上北山村の水分神社 (創建 1450 年代) にあるシンランが自生の最北限である。レッドリストにも掲載される希少な植物で、絶滅危惧種に指定されている小型の蝶「ゴイシツバネシジミ」の幼虫の餌になり、吉野の自然の豊かさをあらわしている。	上北山村
11	吉野川源流－水源地の森	未指定	吉野林業にかかせない豊かな雨によって育まれた吉野川最源流部に位置する原生林。吉野を代表する天然林の一つで、村によって保存されている。	川上村
12	三之公川 <small>(さんのこがわ)</small> トガサワラ原始林	国天然記念物	氷河期に吉野で繁茂した針葉樹の原始林。吉野の自然が多様な植生を支えてきたことを物語る天然林。	川上村
13	土倉翁 <small>(どぐらおう)</small> 屋敷跡	村指定 (歴史記念物)	土倉式造林法を確立した吉野林業の父土倉庄三郎 <small>(どぐらしょうざぶろう)</small> の屋敷跡。功績を称え銅像が建立されている。	川上村
14	「土倉翁造林頌徳記念 <small>(どぐらおうぞうりんしょうとくきねん)</small> 」岸壁碑文	村指定 (歴史記念物)	土倉庄三郎の功績を称え、大滝の岸壁に刻まれた碑文。	川上村
15	下多古 <small>(しもたこ)</small> 村有林	未指定	日本最古の人工林。樹齢が 250～390 年生の杉、桧が育てられている。500 年の歴史を誇る吉野林業の「歴史の証人」として保存されている。	川上村
16	吉野川の開削跡 <small>(かいさくあと)</small>	未指定	激しい蛇行を繰り返す吉野川上流域では、岩場を開削した跡が随所に残るが、大滝と宮滝は特に蛇行が激しく、この開削によって筏の流下が容易となり、吉野の森林資源の開発が加速した。	吉野町 川上村

17	吉野の天然林と人工林	未指定	吉野の山地の各地には、古くからこの地で生育した見事な天然林と、吉野林業による造林により生育した人工美林が発達し、それらの美林を雄大なパノラマとして望み見ることができる眺望点がいくつも存在する。	吉野町・下市町・黒滝村・天川村・下北山村・上北山村・川上村・東吉野村
18	国栖奏 <small>(くすそう)</small>	県無形民俗	応神朝に起源をもつとされる神事。吉野に伝えられた古風な神事の形態をいまに伝えている。	吉野町
19	龍門寺跡 <small>(りゅうもんじあと)</small> と龍門滝 <small>(りゅうもんたき)</small>	県史跡 (龍門寺跡のみ)	龍門滝周辺には、古代から吉野の自然を崇拝し、修行の場とした修行者たちが修行する場であり、後にその修行の場に寺が作られたのが龍門寺である。	吉野町
20	吉野水分神社 <small>(よしのみくまりじんじや)</small>	重文 (建造物)	吉野では天然林・人工林ともに豊かな水によって支えられていた。この豊かな水の配分に関わり古来より崇敬された神社である。	吉野町
21	丹生 <small>(にう)</small> の太鼓踊り <small>(たいこどり)</small>	県無形民俗	豊かな稔を願って踊られた雨乞いのための踊り。吉野に暮らす人々の素朴な信仰に裏付けられた祭礼。	下市町
22	丹生川上神社下社 <small>(にうかわかみじんじやしもしや)</small>	未指定	日本最古の水神を祀る神社。雨乞いには黒馬を、晴れを祈る時は白馬をこの社に献上したという。絵馬発祥の神社としても有名で、森を育むために必要な水を祀った神社として崇敬された。	下市町
23	フロウの滝	未指定	江戸初期の禅僧・盤珪 <small>(ばんけい)</small> の修行の地と伝える。彼は、この滝の畔で当地に留まり修行を重ねたという。	黒滝村
24	河分神社 <small>(かわわけじんじや)</small>	未指定	吉野の暮らし、森を育てるためには水が不可欠であり、その水を分ける神は特別な信仰を集めた。河分神社は二つの川の分岐に鎮座する神であり、長いあいだ雨乞 <small>(あまごい)</small> いや雨祝 <small>(あまいわい)</small> の神事がおこなわれていた。	黒滝村
25	高算堂 <small>(こうさんどう)</small>	未指定	吉野を代表する祭礼の一つである吉野山の会式(花供懺法 <small>はなくせんぼう</small>)をはじめた高算上人の墓と伝え、この地の人々から信仰された。	黒滝村
26	鳳閣寺 <small>(ほうかくじ)</small>	未指定	吉野の修験道の道場として建てられた寺院で、旧境内には修験道を再興した理源大師 <small>(りげんだいし)</small> の廟塔(国重文)があり、本堂には山伏姿の理源大師像(村指定)が祀られている。	黒滝村
27	天河大辯財天社 <small>(てんかわだいはんざいてんしや)</small>	未指定	神社は、日本三大弁天の筆頭とされ、水を祀る神でもあり、音楽や芸能の神様としても有名である。	天川村

28	大峰山寺 <small>(おおみねさんじ)</small>	重文(建造物)	金剛蔵王大権現 <small>(こんごうざおうだいこんげん)</small> を本尊とする、国重要文化財の寺院。天武天皇元(672)年、役行者が苦行ののちに金剛蔵王大権現を感得し、蔵王堂 <small>(ざおうどう)</small> を建立したのに始まると伝える。修験道の根本道場であり、我が国の中でも最高所級の場所に所在する重要文化財。	天川村
29	龍泉寺 <small>(りゅうせんじ)</small>	未指定	1300年の昔、大峯の山々を行場として修行された役行者が、こんこんと湧き出る泉を発見し、これを龍の口と名付けて、そのほとりに小堂を建て、八大龍王をお祀りされたと伝え、これが龍泉寺の始まりである。 寺の裏手の森は、龍泉寺の自然林として県天然記念物に指定されており、吉野の豊かな自然を寺域に持つ寺院である。	天川村
30	栃尾観音堂 <small>(とちおかのんだう)</small>	未指定	江戸時代、放浪の僧円空が当地で彫った聖観音菩薩立像 <small>(しょうかんのんぼさつりゅうぞう)</small> 、大辨財天女立像 <small>(だいべんざいてんにょりゅうぞう)</small> 、金剛童子像、護法神像 <small>(ごほうしんぞう)</small> の四体を安置する観音堂。 栃尾の集落に暮らす人々に信仰をされた小堂。	天川村
31	河合 <small>(かわい)</small> の弓引き <small>(ゆみひき)</small> 行事(八日薬師 <small>ようかやくし</small>)	県無形民俗	この行事の発祥は、すべて口伝により受け継がれてきており、その時期などはさだかではない。山で暮らす民の唯一の生活の糧である木材を出す作業は非常に危険であり、しばしば命をおとすことがあったため、仕事の安全と一年の暮らしの安寧を願い、正月の初めに一年の厄を的に見立てそれを鎮めるという意味でこの行事が伝わったと推察される。 行事の式次第は、古式にのっとり行われており、山で住まいする人たちの歴史と思い入れを感じさせる。	上北山村
32	笹の窟 <small>(しょうのいわや)</small> ・銅造不動明王立像	史跡 県指定 (彫刻)	笹の窟は、大峯山脈の主稜を構成する大普賢岳 <small>(だいふげんだけ)</small> 東方の日本岳の中腹南面岩壁に開口する自然窟であり、「大峯山行所」の「七十五靡 <small>(なびき)</small> 」のうち、「六十二靡」の行場霊地である。樹齢約500年の自然林に囲まれており、冬籠の行場で千日籠り修行が行われていたとされる。北野天神縁起絵巻 <small>(きたのてんじんえんぎえまき)</small> による日蔵上人 <small>(にちざう)</small> の冥界遍	上北山村

			歴と弁覚上人(べんかく)の勧進(1232年)による銘の金銅不動明王像が祀られていた。 吉野で展開した修験道の行場として知られている。	
33	不動窟鍾乳洞(ふどうくつしょうにゅうどう)	県天然記念物	大峰登山の裏行場としての名が高い。 洞窟内には不動明王が祀られている。	川上村
34	丹生川上神社上社(にうかわかみじんじやかみしゃ)	未指定	吉野地方の豊富な雨は林業を育ててきた。水の神様である龍神をお祀りする神社。祈雨(きう)、止雨(しう)のお祈りに黒馬や白馬が奉納された。絵馬の発祥の地ともいわれる。	川上村
35	七滝八壺(ななたきやつぱ)	未指定	水が涸れることなく滾々と流れ落ちる滝で、こうした水が豊かな吉野の森を育んだ。	東吉野村
36	丹生川上神社中社(にうかわかみじんじやなかしゃ)	村指定 (建造物)	水神、罔象女神(みずはのめのかみ)をご祭神とする神社。灌漑用水や井戸を司る「罔象(みずはのめ)」の文字は水の精を指し、罔象女神は日本の代表的な水神でもある。	東吉野村
37	木霊神社(こだまじんじや)	未指定	丹生川上神社中社境内にある神社。祭神の五十猛命(いそたけるのみこと)は林業の神として信仰されている	東吉野村
38	木津川(こつがわ)の祈祷念仏(きとうねんぶつ)	県無形民俗	村落の平穏無事を祈る踊り念仏。毎年二百十日(にひゃくとおか)の前祈祷(まえきとう)として行われ、山で暮らした人々の古風な祭礼芸能。	東吉野村
39	高見山(たかみさん)	未指定	台高(たいこう)山脈の北端、奈良県と三重県境に位置する高見山(1249m)は、古くから信仰の対象となった秀麗な山。山頂の「高角神社(たかすみ)」には、祭神として「瀬織津姫命(せおりつひめのみこと)」も祀られ、神武天皇東征の先導をつとめたという「八咫鳥建津命(やたがらすたけつぬみのみこと)」も祀られ、古くから地元の人たちから尊崇されている。	東吉野村
40	山の神の信仰	未指定	吉野の山の神は、地域毎に多様な形態があるが、構成町村のほぼ全地域に祀られている。 特色のある供物としては、削り掛けなどの作り物、山の道具のミニチュアなどがある。また、山の神がイノコや弁天信仰と習合している地域もある。 山に生きた人々にとって、山の神は最も身近な神であり、そこには素朴な山と森への信仰が息づいている。	吉野町・下市町・黒滝村・天川村・下北山村・上北山村・川上村・東吉野村
41	吉野山の街並み	未指定	吉野山の街並みは、尾根筋に道が作られ、その両側に吉野建(よしのだて)の民家・	吉野町

			商家・旅館・寺社が陸続と続いている。吉野に住む人々にとっては、経済活動の拠点となり、山伏など大峯で修行する人々にとっては、奥駈 <small>(おくがけ)</small> 修行の拠点となった。	
4 2	洞川 <small>(どろがわ)</small> 温泉街	未指定	修験道の大峯山内一の行場とされる龍泉寺を中心に、大峯信仰の登山基地として栄えた洞川温泉には、たくさんの旅館・土産物店・お食事処が軒をつらね温泉街を形作り、修験道の修行の拠点でもあった。	天川村
4 3	前鬼集落跡 <small>(ぜんきしゅうらくあと)</small>	未指定	役行者に従えていた前鬼 <small>(ぜんき)</small> ・後鬼 <small>(ごき)</small> の子どもたちが住んだといわれる前鬼という集落は、明治半ばまで彼らの子孫による五つの宿坊があった。石垣などによって平坦地を造成した景観は、吉野の山地で営まれた集落の姿を伝えている。	下北山村
4 4	吉野建 <small>(よしの建て)</small>	未指定	山地で急傾斜地が多い吉野地域で家屋を建てるために発達した建築様式。地階を持つ懸造の一種で、吉野の山村の独特な景観となっている。道に面する一階は、商業空間などの公的な機能を備え、地階は家族専用の空間として利用している。また、基礎は石垣段状積みとなっている場合が多い。	吉野町・下市町・黒滝村・天川村・下北山村・上北山村・川上村・東吉野村
4 5	吉野の手漉 <small>(てすき)</small> 和紙	未指定	国栖地区では、和紙を漉 <small>(す)</small> く職人が多く集住し、様々な和紙が漉かれていた。現在でも表具用手漉和紙や漆漉紙 <small>(うるしごしがみ)</small> が生産され、吉野の代表的な伝統工芸である。	吉野町
4 6	下市 <small>(しもいち)</small> の三宝 <small>(さんぼう)</small> 製作技術	未指定	吉野下市の里に受け継がれる技巧の矜持、伝統工芸三宝は、吉野地域で発達した曲物 <small>(まげもの)</small> の技術を活かして作られている。南北朝時代、天皇への献上物の器として使用されたのが始まりと言われており、吉野檜の無垢な風合いが悠々の技巧を際立たせている。三宝の名前の由来は、胴 <small>(たい)</small> の三方向に穴が開いているところからつけられたと言われている。現在下市町で製作される三宝は、国内シェアの 90%を占めている。	下市町

47	下市 ^(しもいち) の神酒の口 ^(みきのくち) 製作技術	未指定	神酒の口は神具の一種で、曲げ物の製作技術によって支えられる工芸品で、神棚にそなえる神酒徳利の口に挿して装飾される。「粘り、光沢、香り」と三拍子そろった吉野桧の背板を選び、表面に溝を彫り、編み目のように組み合わせ合わせて作られる。その形は、上部が「炎」で下部が「水玉」である。炎は「風」を呼びおこすといわれ、人間の生活の原点である「火と水」を象って構成されている。	下市町
48	吉野の樽丸 ^(たるまる) 製作技術	国無形民俗	酒樽の側板の材料となるクレと呼ばれる杉板を、マルワという竹の輪に詰め込む技術。江戸時代中期に灘や伊丹の酒を詰める酒樽の側板とするために始まったとされる。吉野で林産加工技術として発達し、全国各地の杉の植林地へ技術が伝播するとともに、その端材を利用した割箸製作技術も派生させた。日本の林産加工技術史上最も貴重な事例の一つ。	吉野町・下市町・黒滝村・天川村・下北山村・上北山村・川上村・東吉野村
49	割箸 ^(わりばし) 製作技術	未指定	割箸製作技術は、吉野の樽丸製作技術から派生した製作技術。樽丸では使えない端材を余すところなく使用するために割箸生産が考案された。現在でも杉桧で良質の割箸【種類：小判・元禄・天削 ^(てんそけ) ・利休・卵中 ^(らんちゅう) 】が生産されている。	吉野町・下市町・黒滝村・天川村・下北山村・上北山村・川上村・東吉野村
50	陀羅尼助 ^(だらにすけ)	未指定	役行者が山中で修行する山伏のために、吉野の薬草から作ったとされる和薬。キハダを主成分とし、現在も地元で生産され、下痢止め・胃腸薬として用いられている。	吉野町 天川村
51	黒滝白きゅうり	未指定	黒滝白きゅうりは、黒滝の自然で育つ野菜。全体が白くえぐみがないのが特徴で、通常の青きゅうりと比べて太くて短く、黒滝でなければ生育しないといわれる。現在まで種子を受け継ぎ村内各家庭で生産されている。コリコリ感のある食感で昔から漬物にして村民に親しまれており、林業が盛んであった頃には、山の作業場で、アサチャとして粥とともに黒滝白きゅうりの漬物を食べる習慣があった。	黒滝村
52	いもぼた	未指定	天川で昔から伝わる郷土料理。米と細かく切ったジャガイモを炊いて手の平大に握り、表面を焼いた料理。山間部	天川村

			で寒冷な気候のため、米が育ちにくいなか、保存食のジャガイモを利用したおやつ料理として各家庭で受け継がれている。	
53	朴 ^(ほう) の葉寿司	未指定	朴の葉寿司は、旧5月の節句(6月5日)などの夏の祭事に、握った飯の上に生鯖の切り身を載せ、これを朴の葉で包んだ寿司。弁当に供せられることもあった。	下市町 黒滝村 天川村 東吉野村
54	春まなのめはり寿司	未指定	春まなは、下北山村の気候でしか栽培できない野菜と言われ、古くから村内で栽培されてきた。長期間の泊り山での仕事の時には、春まなの漬物樽を持ってあがり、山小屋で春まなのめはり寿司を作って食べた。	下北山村
55	栃餅 ^(とちもち)	未指定	上北山村の代表的な特産品。木灰汁で栃の実の灰汁抜きをし、手間暇かけて作っている。現在では、灰汁抜きをする際に石灰などを混ぜて灰汁抜きをするところもあるが、上北山村の栃餅は純粋な木灰を使用している。また、砂糖・塩なども入れておらず、まざりけなしの天然の味で、吉野の山地を代表する餅。	上北山村
56	粽 ^(ちまき) とでんがら	未指定	端午の節句の時に、子孫繁栄や子どもたちの無事な成長を願って、粽 ^(ちまき) とでんがらが作られる。粽はアセの葉などで包み、でんがらは朴の葉で包んだ。粽とでんがらは、男女のシンボルを象ったとも伝えられている。	川上村 東吉野村
57	吉野葛 ^(よしのくず)	未指定	葛の根を精製して作られる葛粉の呼称。古くは修験者の食糧だったものを、村人が自家製したものを売ったのが始まりとされる。 デンプン質が葛の根に集まる厳寒期に葛根を掘り、砕いて桶に入れ、葛の繊維を取り除きデンプンを沈殿させる。これを何度も繰り返すことでデンプンがさらされ、上質のデンプンが得られる。それを天日で数日、屋内で一か月ほど乾燥させて製品となる。 古くは救荒作物としても食されたが、次第に吉野の名産品とされ、吉野葛と呼ばれるようになった。 吉野葛は、雪のように白く曝されたものが上質とされ、葛菓子などの素材として珍重されている。	吉野町・下市町・黒滝村・天川村・下北山村・上北山村・川上村・東吉野村

58	柿の葉寿司	未指定	吉野川流域を代表する寿司。塩鯖を三枚におろし、薄くそいだ切り身を一口大に握った酢飯に乗せて、柿の葉で包んで押しをかけた寿司。近年では鮭も用いられることがある。海がない吉野では、熊野から運ばれた塩鯖をもちい、柿の葉は、渋柿のものが良いといわれている。	吉野町・下市町・黒滝村・天川村・下北山村・上北山村・川上村・東吉野村
----	-------	-----	--	------------------------------------

(※1) 文化財の名称には適宜振り仮名を付けること。

(※2) 指定・未指定の別、文化財の分類を記載すること(例:国史跡、国重文、県有形、市無形、等)。

(※3) 各構成文化財について、ストーリーとの関連を簡潔に記載すること(単に文化財の説明にならないように注意すること)。

(※4) ストーリーのタイプがシリアル型の場合のみ、市町村名を記載すること(複数の都道府県にまたがる場合は都道府県名もあわせて記載すること)。

構成文化財の写真一覧

1. 金峯山寺本堂



2. 本善寺



3. 願行寺



4. 黒滝村旧役場庁舎



5. 石仏



6. みたらい溪谷



7. 洞川湧水群



8. 前鬼のトチノキ巨樹群



9. 池神社と親子杉・夫婦杉



10. シシラン群落



11. 吉野川源流—水源地の森



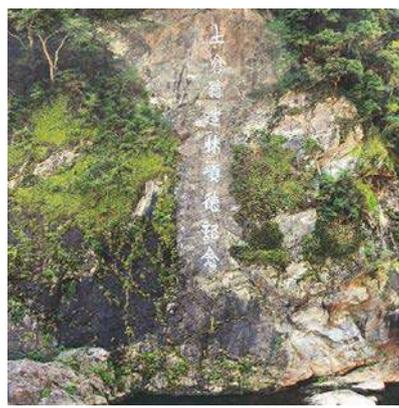
12. 三之公川トガサワラ原始林



13. 土倉翁屋敷跡



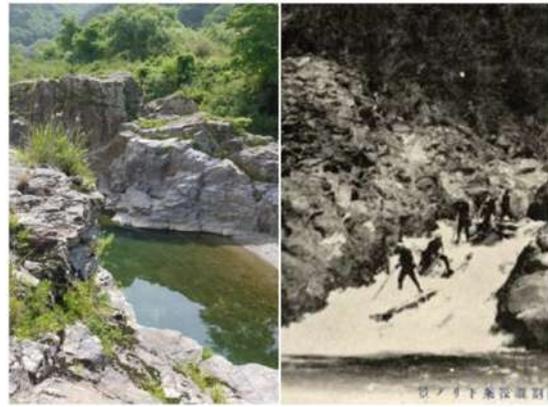
14. 「土倉翁造林頌徳記念」崖壁碑文



15. 下多古村有林



16. 吉野川の開削跡



17. 吉野の天然林と人工林



18. 国栖奏



19. 龍門寺跡と龍門滝



20. 吉野水分神社



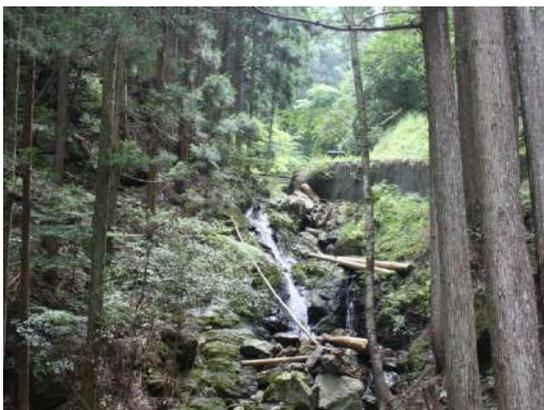
21. 丹生の太鼓踊り



22. 丹生川上神社下社



23. フロウの滝



24. 河分神社



25. 高算堂



26. 鳳閣寺



27. 天河大辯財天社



28. 大峰山寺



29. 龍泉寺



30. 栃尾観音堂



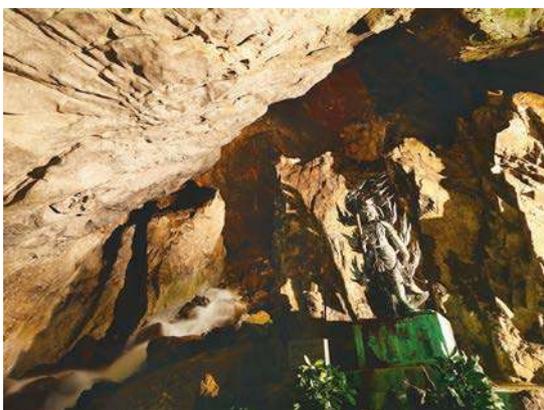
31. 河合の弓引き行事 (八日薬師)



32. 笙の窟・銅造不動明王立像



33. 不動窟鍾乳洞



34. 丹生川上神社上社



35. 七滝八壺



36. 丹生川上神社中社



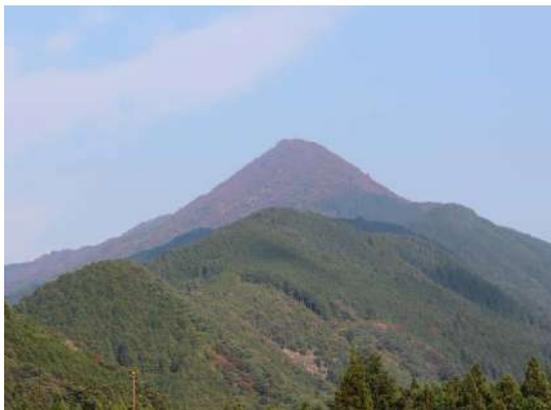
37. 木霊神社



38. 木津川の祈禱念仏



39. 高見山



40. 山の神の信仰



41. 吉野山の街並み



42. 洞川温泉街



43. 前鬼集落跡



44. 吉野建



45. 吉野の手漉和紙



46. 下市の三宝製作技術



47. 下市の神酒の口製作技術



48. 吉野の樽丸製作技術



49. 割箸製作技術



50. 陀羅尼助



51. 黒滝白きゅうり



52. いもぼた



53. 朴の葉寿司



54. 春まなのめはり寿司



55. 栃餅



56. 粽とでんがら



57. 吉野葛



58. 柿の葉寿司



日本遺産を通じた地域活性化計画

認定番号	日本遺産のタイトル
31	森に生まれ、森を育んだ人々の暮らしとところ ～美林連なる造林発祥の地“吉野”～

(1) 将来像 (ビジョン)

【本協議会の将来的なビジョン】

森に生まれ、森を育んだ人々の暮らしとところ～美林連なる造林発祥の地“吉野”～
連綿と受け継がれてきた雄大な自然と暮らしの中で息づいてきたところを守り、伝えていくため、構成文化財を保存しながら、体験型コンテンツの造成、販売や関係人口を増やすための取り組みを行っていく。広域観光の推進による経済の循環と、観光客も住民も誰もが安心・安全に過ごすことができ、地域の魅力を満喫できる地域を目指し、この地域を訪れた来訪者が吉野地域日本遺産のファンとなり様々な角度から吉野地域と関係を築き、持続的な活動を行っていくことで、吉野地域で大切に守られてきた森と人の営みとその文化を将来にわたって大切に継承する。

【上位計画への位置づけ】

協議会を構成する町村における総合計画等において、以下の内容で日本遺産に関する取組が記載されている。また、令和7年度からの計画である各自治体の後期総合計画や観光振興計画にもその取組方針について記載していく。

(1) 日本遺産吉野地域を活用した広域観光の推進を目指し、協議会を構成する町村の自治体事業者との連携を強化する。また、構成町村のみならず近隣の市町村とも連携して誘客を図り、稼ぐ地域を目指していく。

ワールドマスターズゲームズ 2021 関西 (2027)、日本国際博覧会 (大阪万博、2025) 等により中・長期的には訪日観光客の増加が見込まれる中で、インバウンド受け入れ態勢の整備や新たな地域資源の掘り起こし、日本遺産の構成文化財である、豊かな自然や歴史文化資源にストーリー性を持たせ、特色のある独自性を持った観光振興を推進していくこととしている。

(2) 近年、豊かな自然を楽しむ都市部の人々が増えたことで、年々地方のニーズは高まりつつある。このため、森林整備や遊歩道の整備・クリーンな移動手段の導入を進め、観光客に快適に過ごしてもらおうハード整備を進める。さらに、2次交通の確保のため。ライドシェアの検討をはじめ、公共交通機関、道路整備、駐車場整備等、受け入れ環境の課題解決に努め、通年型の観光地を目指し観光客の滞在時間の増加を図る。

また、中にはオーバーツーリズムの状況が一部発生している構成文化財もあり、今後はその対策も必要となってくる。(春の吉野山地区、夏の洞川温泉街、天川大弁財天社)

(3) 日本遺産を自分たちのまちづくりにどのように活かしていくかについて、地域の若手人材や事業者等のワークショップなどを積極的に開催して検討を進め、意見を集約し、豊かな地域資源を活用して地域を活性化していくための取組を促進していく。特に日本遺産の根幹を担っている林業や製材業などの課題解決に努めていく。

(4) 日本遺産や国立公園等の豊かな地域資源を活用し、だれもが快適に過ごせる観光地を目指すべく新たな観光スタイルを推進する。

(5) 水際対策が緩和されて以降、インバウンド観光客の需要が回復してきている。大阪関西万博など国際的に大きなイベントも控える中で、今後外国人観光客が日本に多く訪れることが想定される。そこで、日本遺産のストーリーを知り体験してもらうための受け入れ体制整備を行なう。

【総合的な目標】

日本遺産吉野地域の最大の目的は、森と共に歩んできた「人々の暮らし」と「人々のところ」を守り伝え、地域振興に活かしていくことである。

国内外問わず、観光客の求めるものの上に、温泉旅行、自然観光、グルメ、歴史観光が挙げられるが、日本遺産吉野地域はそのすべてのコンテンツを保持している。

また、各町村において日本遺産吉野地域認定を契機に四季を通じて賑わう持続的な観光地でありたいという共通認識が培われ、地域住民へのアンケート調査等でも歴史や文化資源、自然の保全と活用について高い意識を持っていることが分かっている。

このことから日本遺産吉野地域は、都市住民（観光客）のニーズと地域のニーズがマッチしている理想的な地域であり、都市と地域を繋げるきっかけが大切であると考えている。

本地域における日本遺産の主役は「人」である。日本遺産吉野地域の人々の暮らしとところが生み出してきた営みのある風景《例えば、山（美林）、川、建築（寺社、吉野建、街並み）、割り箸、樽丸（日本酒）など》を守りつつ、体験型コンテンツなどによりその価値を伝えていくことで、吉野地域の魅力を最大限発信できる体制を整えていく。

そのためにも、民間企業との連携を強化していく必要がある。これまで、林業や木材を身近に感じることができ施設が地域内に不足していることが、課題であったがコロナの影響もあり十分な対応が出来ていなかった。しかしコロナ禍収束以降には、2024年に下市町にKITO（体験型複合施設）がオープンし、地元の木材を気軽に購入したり、ワークショップ等が体験出来る施設が整った。また、他のエリアでもモンベル（黒滝村）吉野林業のゲートウェイ施設・気軽に入れる森林施設（SHIMOICHI SMALL FOREST・下市町）が開業、にぎわい拠点施設（吉野町）の整備が進んでおり日本遺産を伝える上での民間活力によるハード整備が整ってきている。その中で日本遺産の取り組みのもと、観光の力を通して文化財の魅力と付加価値を高め、新たなファンを増やしていく。国内のみならず世界中からの観光客を迎える体制づくりに取り組んで行く。

まず、地域住民が吉野地域の日本遺産について知識を深め、自信を持って来訪者に伝えられるようになることで、より高い興味関心や関わりを作り出し、リピーターになって再訪していただける地域を目指していく。

協議会を構成する各町村と地域プロデューサーとの連携により各エリアでのコンテンツの造成や磨き上げを行うとともに、各エリアでのコンテンツを繋ぎ合わせて発信や販売を行う必要がある。

当初は、エリア全体のプロデューサーとして吉野町の地域DMOである吉野ビジターズビューローが全体マネジメントを担う形を模索したが、吉野町の地域DMOであるという特性や2町6村という広大なエリアのマネジメントを行うという観点から全エリアのマネジメ

ントの実施は難しいことから、令和5年度以降は各町村の負担金を50万円に引き上げ日本遺産の活性化やマネジメントに関して多くの実績を持つ佐藤真一氏を地域プロデューサーとして招聘し、各エリアにおける地域資源の掘り起こしやコンテンツの造成、それらを繋ぐ面的マネジメントなどの取り組みを進め、シリアル型の課題である広域での連携を深めてきた。

それと同時に、旅行業2種を持ち地域資源を活用した募集型ツアーの造成や教育旅行、企業研修の受入などに取り組む吉野ビジターズビューローが、佐藤氏が手掛けた各エリアの魅力あるコンテンツを共有し、エリア全体を活用した手配型旅行や視察研修等の誘致、インバウンドを含めた観光プロモーションを行うという形の役割分担で事業を進めている。

また、吉野地域の日本遺産全体を伝えられる人材を育成することで、日本遺産の価値やストーリーを多くの方に知っていただける機会をつくることが重要と考える。インバウンド対応としては、吉野ビジターズビューローにおいて雇用している外国人ガイド1名に加え、令和7年度から外国語対応可能なガイドとして地域おこし協力隊を採用し日本遺産のストーリーを海外にも発信していく。

インバウンド対応については適切な情報が海外の人にも届くように情報発信を行ない、滞在環境の整備とガイドの育成を行なっていく。

そのためには吉野ビジターズビューローが主となりつつわかみ源流ツーリズムや下市町賑わい創出協議会などの各町村で活動している団体と連携し日本遺産を活用したPRを行っていく。また、吉野地域の日本遺産全体を伝えられる人材を育成することで、日本遺産の価値やストーリーを多くの方に知っていただける機会をつくることが重要と考える。

来訪者の増加が地域内消費の増加につながり、事業者の継続的な運営につながる。その結果、店舗の経営が維持されれば、人々の暮らしと人々のこころが生み出してきた営みある風景を維持していくことが出来る。

稼ぐ観光地としての努力が結果として景観の維持に繋がる。そのツールとしてうまく日本遺産を活用していかなければならない。そのためには各ステークホルダーによる意見交換によるお互いの意識の統一が必要であり、ターゲットの選定とそれぞれの時期にあった効果的なプロモーションが必要だと考える。

これら日本遺産のストーリーを活用し「人々の暮らし」と「人々のこころ」を守り続け、その情報を求めている人々に的確に伝えていくことで、観光客の増加、経済の活性化を目指していく。

(2) 地域活性化計画における目標

※各目標に対し、複数の指標を設定可

目標①：地域住民や国内外からの来訪者が日本遺産のストーリーに触れ、その魅力を体験すること						
指標①－A：日本遺産構成文化財に関連した募集型ツアー及び教育旅行を合わせた受入れ人数（単位：人）						
年度	実績					
	2022	2023	2024			
数値	841	1,005	1,221			
年度	目標					
	2025	2026	2027	2028	2029	2030
数値	1,280	1,340	1,400	1,470	1,500	1,500
指標・目標値の設定の考え方及び把握方法	吉野ビジターズビューロー・かわかみ源流ツーリズムや下市町賑わい創出協議会が日本遺産構成文化財に関連した募集型ツアー及び教育旅行を合わせた受入れ人数を指標とし、地域の消費に繋げる。毎年度5%の伸びを目指し1,500人越えを目指す。					

目標①：地域住民や国内外からの来訪者が日本遺産のストーリーに触れ、その魅力を体験すること						
指標①－B：外国人宿泊者数（単位：人）						
年度	実績					
	2022	2023	2024			
数値	791	2,466	5,199			
年度	目標					
	2025	2026	2027	2028	2029	2030
数値	5,460	5,730	6,020	6,320	6,640	6,972
指標・目標値の設定の考え方及び把握方法	奈良県宿泊統計調査から数値を把握する。2024年度を基準に毎年前年比5%増を目指す。					

目標①：地域住民や国内外からの来訪者が日本遺産のストーリーに触れ、その魅力を体験すること						
指標①-C：ワークショップ参加人数						
年度	実績					
	2022	2023	2024			
数値	未計測	1,812	1,875			
年度	目標					
	2025	2026	2027	2028	2029	2030
数値	1,900	1,920	1,940	1,960	1,980	2,000
指標・目標値の設定の考え方及び把握方法	<p>日本遺産にまつわる伝統工芸品の制作イベント等でワークショップを開催し、ストーリーを身近に感じてもらい多くの人にPRする。</p> <p>町内で開催するワークショップの回数に加え、構成町村が参加している団体のイベントで木に関わるワークショップイベントの参加者数を数値とし毎年2,000人の参加者を目指す</p>					

目標②：地域において日本遺産のストーリーが誇りに思われること						
指標②-A：地域住民文化財保存における満足度意識調査（単位：％）						
年度	実績					
	2022	2023	2024			
数値	-	-	29.7			
年度	目標					
	2025	2026	2027	2028	2029	2030
数値	32	34	36	38	40	42
指標・目標値の設定の考え方及び把握方法	<p>令和6年度に県民アンケートの内容が一新された。奈良県民アンケート調査において、将来的に奈良県に住みたいと答えた人の中から、構成地域である「地域5（奈良県南東部）」における【世界遺産や文化財などが多く、歴史的な雰囲気を感じるから】と答えた人の割合から算出。</p>					

目標③：日本遺産を活用した事業により、経済効果が生じること						
指標③-A：主要スポットの観光客入込客数（単位：千人）						
年度	実績					
	2022	2023	2024			
数値	332	364	414			
年度	目標					
	2025	2026	2027	2028	2029	2030
数値	420	430	440	450	460	470
指標・目標値の設定の考え方及び把握方法	観光客数が把握できる主要構成文化財スポットの入込客数を指標とする。（金峯山寺、洞川湧水群、不同鍾乳洞、七滝八壺、高見山、木霊神社、丹生川上神社、黒滝村旧役場庁舎、笙の窟、前鬼不動七重の滝）2024年の数値から毎年2%増を目指す。					

目標③：日本遺産を活用した事業により、経済効果が生じること						
指標③-B：日本遺産に関連するツアー実施回数（単位：回）						
実績						
2022	2023	2024				
63	59	77				
目標						
2025	2026	2027	2028	2029	2030	
70	70	70	70	70	70	
指標・目標値の設定の考え方及び把握方法	吉野ビジターズビューロー・川上源流ツーリズムを中心に各町村が実施する日本遺産に関連するツアーの実施回数を指標とする。これまでに作成した多くのツアーを継続して実施しているため造成数ではなく実施回数を目標とし2022年～2024年の実施回数平均上回る通年70回を目標値とする。					

目標④：日本遺産を活用した事業により、経済効果が生じること						
指標④－A：構成町村のふるさと納税（単位：千円）						
年度	実績					
	2022	2023	2024			
数値	206,869	249,725	183,421			
年度	目標					
	2025	2026	2027	2028	2029	2030
数値	213,000	213,000	213,000	213,000	213,000	213,000
指標・目標値の設定の考え方及び把握方法	構成されている8町村のふるさと納税の総額を記載する。改正などにより寄付額は大きく変動するため2022年～2024年の平均値である数値を目標とする。					

目標④：日本遺産のストーリー・構成文化財の持続的な保存・活用が行われること						
指標④－A：構成文化財を継承する人材の支援者数（単位：人）						
年度	実績					
	2022	2023	2024			
数値	6 10	6 7	7 6			
年度	目標					
	2025	2026	2027	2028	2029	2030
数値	7	7	7	7	7	7
指標・目標値の設定の考え方及び把握方法	日本遺産を構成する事業を営む後継者不足が深刻化する中で、奨励金の支給や組合活動の支援を行うことで構成文化財の技術・技法を持つものが途絶えることの無いよう継続して支援していく。 ・日本遺産吉野地域の構成資産に関する技術・技法が継承されるよう、無形文化財（割箸の製作技術、柿の葉寿司、手漉き和紙、吉野葛等）の後継者として支援していく人材の数を把握する。					

目標⑤：地域への経済効果も含め広く波及効果が生じること						
指標⑤-A：入込客数（単位：千人）						
年度	実績					
	2022	2023	2024			
数値	2,469	2,588	2,884			
年度	目標					
	2025	2026	2027	2028	2029	2030
数値	2,940	3,000	3,060	3,120	3,120	3,120
指標・目標値の設定の考え方及び把握方法	2024年の数値が2800千人を基準とし以降、登録前のH27～H28年の入れ込み客数の伸び率であった2%の伸びを毎年目指しコロナ前の最大値であった3,000千人超えを目標とする。					

目標⑤：地域への経済効果も含め広く波及効果が生じること						
指標⑤-B：日本遺産構成文化財を活用した新商品の開発（単位：プラン）						
年度	実績					
	2022	2023	2024			
数値	19	15	9			
年度	目標					
	2025	2026	2027	2028	2029	2030
数値	15	15	15	15	15	15
指標・目標値の設定の考え方及び把握方法	<p>吉野ビジターズビューロー・かわかみ源流ツーリズムや下市町賑わい創出協議会などが主となり造成開発した商品・ツアー数や体験の合計値を記載。</p> <p>観光客の周遊促進と滞在時間延長による観光消費増大を目的として、日本遺産構成文化財である「吉野葛」を活用したスイーツ食べ歩き事業を実施。若年層にも吉野葛の魅力を伝えるため、見た目の美しさも意識した新商品のラインナップを増やすことで、年間を通じた観光客誘致を狙う。</p>					

目標⑤：地域への経済効果も含め広く波及効果が生じること						
指標⑤-C：構成する8町村の宿泊客数（単位：人）						
年度	実績					
	2022	2023	2024			
数値	163,191	166,126	165,224			
年度	目標					
	2025	2026	2027	2028	2029	2030
数値	168,500	171,900	175,300	178,800	182,400	186,000
指標・目標値の設定の考え方及び把握方法	構成する8町村に宿泊する観光客数を目標とする。 奈良県がとりまとめている宿泊統計データを指標とし 例年2%の伸び率を目指す。					

(3) 地域活性化のための取組の概要

日本遺産吉野地域は、春の吉野山の桜の時期を筆頭に夏の川遊びやアウトドア、秋の紅葉など、季節ごとにそれぞれのエリアでシーズンに観光客が集中して訪れる傾向があり、それ以外の時期は来訪者が大きく減少するという現状である。

日本遺産吉野地域の構成文化財は歴史・文化、人々の暮らし、食など構成文化財が多岐にわたり、季節に関係なく楽しんでもらえるコンテンツが多く存在する。このような強みを生かし、日本遺産の価値を伝え、来訪者に地域の魅力に触れてもらうため、体験型プログラムの充実を図り、そのストーリーを伝えつつ地域経済の活性化に努めていくために以下の取組を進める。

取組① 日本遺産を活用しストーリーを内外に伝えるため、民間事業者を巻き込んだ体制づくりの強化

本協議会では日本遺産のストーリーを来訪者に広く伝えるため、民間事業者との連携を強化する。令和5年～令和6年に民間団体の下市町にぎわい創出協議会が日本遺産関連での補助金事業を申請し採択された。また、同団体は令和6年より正式に協議会に入会した。また、近隣の日本遺産認定地域の構成団体である明日香村商工会が文化庁の補助金採択を受け、当協議会地域への周遊観光を視野に入れたガイド育成やツアー造成を実施される際に両地域での現地研修を行うなど相互の連携を深めた。

地域の民間事業者との連携を強化するため、体験コンテンツの造成及び販売のプロデュースに地域プロデューサーである佐藤真一氏に地域に入って頂き、それぞれのコンテンツを磨き上げ、新規コンテンツも作りながら OTA にて販売を行なう体制を整えた。延べ 23 事業者が参画し、出来上がったコンテンツについてはモデルルート等を新たに定めて販売していく。

ツアーについてはコーディネーターであり地域 DMO でもある吉野ビジターズビューローが旅行業 2 種を取得しているため、主体となりコンテンツを使用したツアー販売を行ない誘客を図っていく。

また、これまでと同様に、現在それぞれの地域で活動する構成委員以外の民間団体（吉野と暮らす会、フォレストかみきた、下北山地域商社、ヨイヨイ川上、かわかみ源流ツーリズム等）との結びつきを強化していく。各団体の行うツアーやイベントを協議会が共有し、吉野ビジターズビューローと連携する体制を強化していく。

また、地域 DMO 法人である奈良県ビジターズビューローとも情報共有を密にし、プロモーションや商品造成を中心に連携を強化していく。

取組② 構成町村の各種計画への日本遺産の位置づけの徹底と、協議会担当者の意識の共有

協議会内で取り組む事業については、これまで事業ごとに協議し、ターゲット設定を行ってきた。今後は地域プロデューサーやツアー造成や受入手配を行う吉野ビジターズビューローとの連携を図りながら、事業ごとに最適なターゲット設定や情報発信を行っていく。

地域プロデューサーや吉野ビジターズビューローとの意見交換を密にし、事務局会を頻

繁に行い、協議会の将来像やそれを達成するための施策について、情報共有や意思統一に努めるとともに各町村の上位計画や事業にも反映させる。

取組③ 日本遺産のストーリーを来訪者に詳しく伝えるための人材育成と、日本遺産の技術・技法を継承する人材の育成

各町村において日本遺産の情報発信の拠点となる施設で業務に従事する自治体職員に向けて、日本遺産の価値を伝えるための研修会を行う。各町村にはそれぞれ地域コーディネーターやボランティアガイドが在籍しており定例会や講座などを実施しているため日本遺産吉野地域のなかで町村の枠組みにとらわれず、構成文化財への訪問を促すことで、域内の広域周遊が可能になるよう人材育成に努めていく。

また、日本遺産の技術・技法を継承する人材の育成や無形文化財を継承するための支援にも積極的に取り組んでいく。

取組④ 来訪者が日本遺産のストーリーを快適に楽しむための環境整備

当該地域には鉄道や路線バスが通っていない地域も多く、来訪者の利便性向上のために、域内移動手段の確保に取り組む。吉野ビクターズビューローを中心に E-Bike のレンタサイクルの導入を積極的に行なっており、今後は鉄道会社と連携してシェアサイクル事業を拡大していく予定である。また、より快適な環境整備のため遊歩道の改修や駐車場の確保も行う。

そして、構成文化財を守るため、美しい景観の保全にも取り組んでいく。

取組⑤ 日本遺産のストーリーを活用して観光客を誘致する

日本遺産のストーリーを活用して、広域的な観光周遊を目指していく。町村の枠にとらわれず、来訪者が日本遺産をきっかけとして複数の町村を巡り滞在時間の増加を目指すことで地域内の消費の拡大につなげる。これまで磨き上げた体験コンテンツを販売して地域経済を活性化させる段階に入っている。

また、教育旅行、企業研修を積極的に誘致することで、次代を担う若者に日本遺産吉野地域のストーリーを伝え、大切に継承するべき資源であることへの理解を醸成する。

取組⑥ 地域の学校や民間事業者と連携して、日本遺産のストーリーを子どもたちに伝える

地域内の小中学校等に日本遺産のストーリーを伝えることで、地域の文化に誇りを持つ子ども達を増やしていく。さらにストーリーの根幹である林業についても知識を深めるため、ふるさと教育を積極的に行っていく。

民間の団体により、吉野林業を広く知ってもらう取組が活発になってきている。官民連携で、ストーリーの根源である林業について、多くの人に気軽に触れる事が出来る機会の創出に取り組んでいく。

取組⑦ SNS を活用し新しい層へ日本遺産のストーリーを伝えるためのチャレンジを行う

これまで、協議会の取組として情報発信の担当者を町村ごとに選出し、連携して SNS を活用した発信を行ってきた。さらに SNS 等の活用方法について知識を深めるとともに、民間の関係団体とも連携しながらバージョンアップを図り積極的なプロモーションを実施

していく。

エリア全体の来場者属性として高齢者世代が多く、若者世代への訴求として、また美しい自然景観が残されている地域であることを活かし、「映える」投稿をシェアする傾向にあるインスタグラムでの発信を重点化する。フォロワーと連携しながら多くの人に吉野地域を知ってもらう機会を創出していく。

(4) 実施体制

【実施体制】

協議会構成団体が中心となり実施するが、大学や民間事業者からも随時参加を募る。

【行政】吉野町・下市町・黒滝村・天川村・下北山村・上北山村・川上村・東吉野村、(奈良県)

【民間】吉野ビジターズビューロー・吉野町商工会・吉野中央森林組合・下市町観光協会・下市町商工会・下市町森林組合・黒滝村商工会・黒滝村森林組合・天川村商工会・大峯山洞川温泉観光協会・天川村森林組合・下北山村商工会・上北山村商工会・上北山村観光協会・吉野きたやま森林組合・吉野かわかみ社中、川上村商工会・川上村森林組合・東吉野村観光協会・東吉野村商工会・下市町にぎわい創出協議会 (R6 年度から加入)

(事務局は吉野町産業観光課)

協議会の構成町村は、地域の関係団体や民間事業者等との情報交換を積極的に行い、情報を確実に共有する体制を構築している。

令和 4 年度に条件付き認定を受けるまでは、当初協議会予算は各地域 12 万円の負担により事業を実施していたが、令和 4 年度の認定調査において条件付き地域として厳しい審査となったことから、構成町村で協議を重ね、令和 5 年度以降は、協議会の事業費を確保するために各地域 50 万円に引き上げるとともに奈良県の補助金を活用するなどし、事業の充実を図ってきた。限られた財源の中でも積極的に体制を強化しており地域一丸となって日本遺産の価値を高めている。

また、奈良県において令和 4 年 4 月に施行された県南部東部地域の振興を基本理念とする「奈良県美しい南部・東部地域を県と市町村が協働して振興を図る条例」には、日本遺産吉野地域はすべてその対象地域に含まれていることから、吉野地域日本遺産の活用方法について県の担当部局と連携を密に振興を図っていく。

今後、日本遺産吉野地域のエリア内のコンテンツ造成や誘客において中心的役割を果たすのが吉野ビジターズビューローとなる。この団体は、旅行業 2 種免許を保有していることから、日本遺産を活用した体験コンテンツの造成や誘客事業を積極的に行っていく。ただし、地域 DMO のためマネジメントエリアが吉野町に限られるため、エリア全体のマネジメントについては、日本遺産地域の活性化等の実績を多く持つ佐藤真一氏を地域プロデューサーとして協議会が招聘し事業を行っていく。

また、それぞれの構成町村においても日本遺産関連のツアー造成や情報発信に精力的に取り組む団体が増え、町村の枠組みにとどまらず、来訪者及び宿泊者を隣接する町村の構成文化財に案内するツアーも開催している。

今後は構成各町村において情報交換を積極的に行い民間団体の取り組み等を共有し、地域の交通事業者との連携や協議の機会を設けるなど、吉野地域日本遺産を広域的に伝えていく体制づくりを強化する。

【人材育成・確保の方針】

吉野地域が日本遺産に認定を受けたことで、地域のキーマンが各町村に生まれ、民間団体等による独自イベントやツアーが開催されている。それらの取り組みに横串を通し広域的な観光振興を担う地域プロデューサーの役割を佐藤真一氏が担い、地域独自の魅力ある観光コンテンツの造成やOTAでの販売支援、エリア全体の面的なプロデュース、観光振興の取り組みを推進するとともに、そのコンテンツを組み合わせた商品開発や視察研修等の受入などを地域DMOである吉野ビジターズビューローが担った。また、造林発祥の地として、吉野林業を次世代につなぐ取り組みを各町村が推進している。スイスのフォレスター制度などをモデルとした奈良県フォレスターアカデミーが、人材養成機関として当地域で設立され、各町村が林業の担い手育成及び未来の森林環境管理を創造する取り組みが広がっている。協議会では、各町村での人材育成や後継者養成の情報連携を図ることで、吉野地域全体で日本遺産の構成文化財を継承していく。

また、民間団体である吉野と暮らす会の動きも活発になってきており、構成町村内の林業、製材業、伝統文化産業に従事する若者が、ストーリーの根幹である林業に触れる機会を積極的に作る取組が生まれてきている。特に2023年秋から毎年開催されているウッドフェスにおいてはクラウドファンディングを行ない、自分たちだけでイベントを行なうなどしている。

また、大阪関西万博においても同団体より吉野杉のベンチがCo-Design Challengeに採択され、吉野杉の取組を世界に発信する準備が整えてきた。また、そこから派生して同企画に採択された象印が開発する商品に吉野杉の材が使われることになるなど、民間同士の交流も活発になってきており、ストーリーを広める土壌が出来てきている。

(5) 日本遺産の取組を行う組織の自立・自走

日本遺産の取り組みやその価値を発信していくことも協議会の役割であるが、協議会に資金を集中してすべての事業を実施するのではなく、各町村が支援する吉野ビジターズビューローや源流ツーリズム、地域商社など体験やツーリズムを提供できる組織間の連携を促すことが自走につながると考える。

日本遺産吉野地域そのもののブランディングや活用の方向性を決めるのは協議会で引き続き検討していく。

また、森林環境譲与税等の財源を視野に入れ、都市部の自治体と連携した森林体験ツアー等の取り組みを継続していくことで、森林保全や活動等に関心をもつ人材の裾野を広げ、吉野林業の担い手不足といった課題解決に取り組んでいく。

行政はそれを支援し民間事業者はその支援を上手く活用しながら来訪者を増やし、「稼ぐ」努力をすることで、その営みが維持されていくと考える。

文化や事業を継続させることに寄与する体制を整えていくことが自走に繋がると考える。

【教育における日本遺産の価値を伝える人材の確保】

地域の子どもたちに日本遺産の価値を伝え、地域に誇りを持ってもらう取り組みを今後も継続して行う。日本遺産のストーリーに興味を持ちその価値を理解した子どもたちが次世代に伝えていくことが、日本遺産の継続的な運営につながると考える。

【大学との連携について】

外部の視点から地域の魅力を考えてもらうため各大学との連携も強化していく。現在、以下の大学と連携しながら日本遺産を含む自然を守り活用していく取組を行っている。今ある地域資源の活用と、新たな地域資源の発掘に取り組む。

(早稲田大学、奈良女子大学、大阪工業大学、奈良県立大学 等)

吉野地域日本遺産の自走について、再審査以降、協議会構成団体の中で方法を模索してきた。まず、短期的な目標として、地域の体験コンテンツの把握とコンテンツの新規造成から始めてきた。

地域内で日本遺産に関連する体験コンテンツは多くある。しかしながら OTA に登録されているコンテンツは少なく、単発的なイベントにのみに出店している事業者が多い現状がある。例えば、柿の葉寿司作り体験、木工作り体験、林業体験などが挙げられる。各事業者がそれぞれ「本業」を持っていて、それ自体を生業としている事業者が少ないという現状が課題として浮き彫りとなってきた。様々な理由を、協議会全体で調査し把握することから始めた。シリアル型ゆえ他町村にどのようなコンテンツがあるのかをきちんと把握できていなかった課題もあがってきた。構成団体員がそれぞれの状況を把握し、閑散期にそれらのコンテンツを販売して行くことで、通年で来訪者を募り、ツアー等を形成することで地域全体で日本遺産の価値を伝える仕組み作りを行なっていく。

そのために、体験コンテンツ販売のための地域コーディネーターとして佐藤真一氏に地域に入って頂き、地域内全体の事業者ヒアリングと課題抽出を行ない販売に繋げる取組を行っている。

これまでの取組から域内の状況把握が終了し、中期的には、コンテンツの販売に注力していく。OTA の登録の推進を引続き行っていく。協議会として、令和 6 年度に販売用の HP を新規に立ち上げたため、このサイト運用を充実させ日本遺産の商品販売に注力していきたいと考える。

長期的には OTA だけでなく、実際に域内の商品を販売してくれる地域商社等の企業誘致やツアーを催行してくれる企業を相談会等で探しつつ、官民連携で地域経済の活性化を行っていく。インバウンドも含めた観光客のツアーを造成し、それを販売する事業者を地域内に増やしていきたいと考える。

(6) 構成文化財の保存と活用の好循環の創出に向けた取組

柿の葉寿司が構成文化財として認定を受けたことで注目度が上がり、事業協力の機運が高まったことで組合の発足につながった地域もある。それにより事業者横断による食べ比べセットの開発やふるさと納税への参画など、構成文化財の新たな地域活性化のきっかけとなっている。また、日本遺産マークのシールを作成したことで、日本遺産活用に向けた機運が高まり多くの事業所が日本遺産の活用に参画している。

情報発信では、日本遺産認定以降に協議を重ね、SNS 研修などで担当者のスキルアップ

を行い、独自の撮影技法や編集方法を身につけてきた。発信する時間やタグの付け方、色味など創意工夫を重ねた投稿を行うことで着実にフォロワーを増やしている。これまでとは違ったフォトジェニックな写真として構成文化財や季節の風景を発信することで歴史・文化に興味がある来訪者だけでなく、写真に興味のあるカメラマンや、その写真を見て日本遺産吉野地域に行きたくなった来訪者など、新たな誘客のツールとして情報発信を強化していく。

また、日本遺産を活用した新商品の開発により、これまでの客層とは違った形の来訪者の増加も見込まれ、地域事業者への誘客の幅が広がり地域全体が活性化することが見込まれる。今後も、日本遺産を生かした観光関連事業の創出に尽力し、地域経済の好循環が生まれるよう取り組んでいく。

(7) 地域活性化のために行う事業

(7) - 1 組織整備

(事業番号 1 - A)

事業名	吉野地域日本遺産活性化協議会運営事業		
概要	事務局会や幹事会、総会の開催などの運営を行う。		
	取組名	取組内容	実施主体
①	吉野地域日本遺産事務局会の開催	各団体の情報共有を目的として定期的に事務局会を開催する。場合によってオンライン会議もうまく活用する。	吉野地域日本遺産活性化協議会
②	総会の開催	民間団体との意見交換や取り組み実績報告のための総会を年1回行う。	吉野地域日本遺産活性化協議会
③	地域内民間団体との意見交換会の実施	協議会の構成団体以外の団体で、日本遺産に関係するツアーやイベントを行う団体との意見交換を行い協力して事業を実施する体制を整える。	吉野地域日本遺産活性化協議会・民間事業所
④	地域外の民間企業との意見交換の実施	協議会が抱える課題解決のため、外部の民間活力導入を目指し、協議会の取組に興味のある企業との意見交換を積極的に行なう。 地域の課題解決を公開して、その課題を解決するための提案を企業側からさせる取組を行なう。	協議会 民間企業
年度	事業評価指標		実績値・(目標値)
2022	事務局会実施回数/民間団体(地域内外問わず。事業者含む)との意見交換		9回/7回(6回/2回)
2023			8回/57回(12回/3回)
2024			8回/67回(12回/3回)
2025	〃		12回/20回
2026	〃		12回/20回
2027	〃		12回/20回
2028	〃		12回/20回
2029	〃		12回/20回
2030	〃		12回/20回
事業費	2025年度： 0 2026年度： 0 2027年度： 0		
継続に向けた事業設計	それぞれの地域において日本遺産に関するツアー造成や商品販売、ワークショップやふるさと納税などの取り組みは個別に行われており、情報共有が出来ていなかった部分はこれまでの反省点と考えている。 今後は協議会において日本遺産吉野地域で取り組んでいる各事業を		

	<p>見える化し、共有できる体制づくりを行っていく。</p> <p>幹事会、事務局会を積極的に行い、情報共有を行っていく。オンラインでの開催によりシリアル型の距離の問題を解決し意見交換の回数を増やしていく。</p> <p>また、協議会に加入している民間団体と個別に活動する民間団体の両方の意見交換会を積極的に実施することで、日本遺産活性化協議会と連携し情報発信等の事業を行っていく。令和6年度に下市町にぎわい創出協議会が正式に加入した。</p> <p>令和5年度より行なっている体験コンテンツの造成、販売事業においてはのべ23事業者が参画しそれぞれの事業者が販売するコンテンツをひとまとめで紹介できるサイトを作成した。</p> <p>その際に、コーディネーターとして佐藤真一氏に入ってください、地域の声を拾い上げ伴走型でOTA掲載までの支援を行なった。</p> <p>また、地域の民間団体とは別に協議会の課題解決に協力してくれる事業者をみつけるためのマッチング相談会にも参加した。</p> <p>協議会事業として本地域の課題を企業に紹介し、本地域の課題解決にマッチする企業を探すためのオンライン商談会に参加した。プレゼンを行ない、多くの企業に聞いてもらい、興味をもった12社と意見交換を行ない、令和7年度以降で数社と一緒に事業を行なう予定</p>
事業費	2028年度： 0 2029年度： 0 2030年度： 0
継続に向けた事業設計	協議会内の地域だけでは解決出来ない問題を、マッチング商談会などで連携した企業と一緒に官民連携で課題解決に取り組んでいく。

(事業番号1-B)

事業名	事業の企画・実施を行う組織の整備		
概要	事業の企画・実施を行う体制を整備し、事務局会以外に担当者や地元団体が意見交換できる場を設けるなど、官民連携が行える体制を整える。		
	取組名	取組内容	実施主体
①	情報発信担当者会議	SNS 情報発信を行う担当者や新たな企画を提案するための若手担当者が集まる会議を積極的に行っていく。部会を作りそれぞれで個別の事案について取り組む体制を整備する。(令和5年1回。令和6年1回。)	協議会
②	民間団体との情報交換	民間団体の会議に参加し、現地視察を行う。協議会メンバーがそれぞれの取り組みを把握することで、各地域の取り組み方針	協議会 民間団体

		と協議会方針との足並みを揃える。 地域の課題解決にマッチする民間事業者との意見交換を積極的に行っていく。	
③	よいよい天川開催にむけての意見交換	洞川温泉街の夜を楽しむイベント企画のため、民間事業者と企画運営を行った。 2022～2024年 毎年7回 今後も継続して行なう。	天川村
年度	事業評価指標		(実績値)・目標値
2022	個別部会の開催/民間団体との意見交換		(7回/1団体)3回/8団体
2023			(57回/25団体)3回/8団体
2024			(67回/27団体)3回/8団体
2025	民間団体との意見交換		50回
2026	〃		50回
2027	〃		50回
2028	〃		50回
2029	〃		50回
2030	〃		50回
事業費	2025年度：500千円 2026年度：500千円 2027年度：500千円		
継続に向けた事業設計	民間団体との意見交換を積極的に行い、OTA登録後の販売に就いて意識を共有する。地域間での事業者を繋ぐことで新たな商品やツアーを販売し、これまでに出来たコンテンツを単体で販売するのでは無く、組み合わせで地域全体の消費に繋げていく。 将来的には、各地域の団体やコーディネーター等が地域をプロデュースし自走していくことを目指す。		
事業費	2028年度：500千 2029年度：500千円 2030年度：500千円		
継続に向けた事業設計	民間団体との意見交換を積極的に行い、OTA登録後の販売に就いて意識を共有する。地域間での事業者を繋ぐことで新たな商品やツアーを販売し、これまでに出来たコンテンツを単体で販売するのでは無く、組み合わせで地域全体の消費に繋げていく。 将来的には、各地域の団体やコーディネーター等が地域をプロデュースし自走していくことを目指す。		

(事業番号 1-C)

事業名	大学連携事業		
概要	大学と連携して、未来を担う学生の目線によりストーリーの根幹である林業や景観保全、地域資源の掘り起こしについて共に考える。		
	取組名	取組内容	実施主体
①	ベンチ村プロジェクト	豊かな森林の環境保全や景観向上を図り、村産材の魅力を村内外に伝えることで地域産業の活性化につなげる。 早稲田大学で建築を学ぶ学生と村内の団体であるがんばろらえかみきたが連携し、村内各所へ村産材を使用したベンチを設置する。製作にあたり、学生が村の自然や特徴を活かしたデザイン・設計を行い、がんばろらえかみきたが設置場所の選定や製作を行う。令和5年から始まったこの事業は、年間1~2基のベンチを村内に設置することを目標としている。	上北山村、 早稲田大学
②	水源地の森 環境教育 吉野林業継承事業	2010年に「連携・協力に関する協定」を締結し、廃校舎のリノベーションや新入生オリエンテーリングなど実施してきた。 日本遺産に登録以降は、住民を講師として、日本遺産の価値を伝える座学授業や水源地の森トレッキングなどを行い、森と共に生きてきたこの地の暮らし・文化を伝えている。この取り組みは、日本遺産の構成文化財を現地学習のフィールドとして位置づけ、今後も継続して行っていく。	川上村、大阪 工業大学
③	都市部の学生団体との 交流事業	学生団体まといの活動 村の木材を使って生まれ変わった空き家を拠点に、東京からの企業誘致や学生団体の発足による地域課題解決の動きに発展している。 首都圏の大学生が中心となって設立した「まとい」は、村で伐採した木材を使って、地域住民と空き家リノベーションを行っている。加えて、地域課題(構成文化財を含む特産品の生産者高齢化等)に向き合い、プロモーションを行うことで、さらなる関係人口の創出、地域の担い手発掘を行っている。 現在は、首都圏でのPRや地元の児童生徒	下北山村

		<p>に対して、学習指導等を実施している。</p> <p>2022年 村の特産品収穫、植付手伝い/都内イベント出展 (村のPR)</p> <p>2023年 地域未来塾実施/慶応義塾大学三田祭イベント出展 (村のPR)</p> <p>2024年 地域未来塾実施/慶応義塾大学三田祭イベント出展 (村のPR)</p> <p>継続事業。</p>	
④	地域の魅力再発見事業	<p>奈良県立大学と連携して「地域の魅力の掘り起こし」をテーマとし、地域の伝統的食文化や生活慣習などの聞き取りや復元作業を通じて、地域の魅力の発見に努めている。</p> <p>(具体的取り組み内容)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・村の良さや歴史、伝統を伝えるためのパンフレット作成 ・村に伝わる伝統的な料理の組み合わせ、献立作りと情報の発信 ・林業の仕事がしやすい「黒滝袴」という伝統的な衣服の復元と情報発信 ・ふるさとCM大賞へエントリーし村の魅力を発信するCMの制作を行う 	黒滝村、奈良県立大学
⑤	近畿大学、奈良国立大学機構との連携	<ul style="list-style-type: none"> ・奈良国立大学機構と包括連携協定を締結 →下市町役場にサテライトオフィスを置き活動をする特任助教の指導の下、下市町内の事業者や住民と関わる授業等を実施。(特任助教は令和5年度で終了したが、その後も大学生は町内での活動を行っている) ・近畿大学農学部と包括連携協定を締結 →令和5年度と令和6年度に農学祭(学祭)で割箸や柿、三宝などを販売し、下市町の魅力発信を行った。 	下市町
⑥	奈良国立大学機構との連携	<p>国立大学法人奈良国立大学機構の組織内にある奈良カレッジズ連携推進センターが奈良型エクステンション事業を実施。その拠点の1つが東吉野にある旧四郷小学校。</p> <p>奈良女子大学地域連携推進センターや大和・紀伊半島学研究所も協力している。</p>	東吉野村

		地域在住の特任教授を設置し、ひよしカレッジ四郷という任意団体を創設。 その活動の一環で、特任教授と奈良県フォレスター、林業関係者や村民さんと吉野林業の伝統や歴史、山の現状について考える大人の学習会を実施。	
⑦	特産品魅力発信事業	阪南大学と連携して製材所へのフィールドワークの受け入れを行っている。 また連携事業の一環として、大阪市内で吉野町を深く知るための講演を行っている。 大阪府内の商業施設で学生たちによる吉野杉の割箸作りのワークショップを実施した。吉野の上質な割箸の魅力発信をしている。また吉野杉と吉野の和紙を使った年輪アートのワークショップも実施した。次年度以降も継続して実施予定。	吉野町
年度	事業評価指標		実績値・目標値
2022	各大学と連携して行う事業数		4事業
2023			8事業
2024			8事業
2025		〃	8事業
2026		〃	8事業
2027		〃	8事業
2028		〃	8事業
2029		〃	8事業
2030		〃	8事業
事業費	2025年度： 0 2026年度： 0 2027年度： 0		
継続に向けた事業設計	<p>大学での様々な学びは、次の世代を担う若者にとって、広い視野で物事を考える人材の育成につながる。各大学と連携し取り組みを進めることは、地域資源の掘り起こしだけでなく若者から、後継者問題など構成町村が有する多くの課題について有意義な提案や意見を聞く機会となる。また、学生が社会人となり仕事での活動を通じて、吉野で学んだ取り組みを活かしていただくことが出来れば、後継者問題にも一翼を担って頂くことが出来る。</p> <p>それぞれの取り組みについて協議会内で共有し、ストーリーを伝える仕組みづくりに生かしていく。</p>		
事業費	2028年度： 0 2029年度： 0 2030年度： 0		
継続に向けた事業設計	<p>大学での様々な学びは、次の世代を担う若者にとって、広い視野で物事を考える人材の育成につながる。各大学と連携し取り組みを進めることは、地域資源の掘り起こしだけでなく若者から、後継者問題など構成町村が有する多くの課題について有意義な提案や意見を聞く機</p>		

	<p>会となる。また、学生が社会人となり仕事での活動を通じて、吉野で学んだ取り組みを活かしていただくことが出来れば、後継者問題にも一翼を担って頂くことが出来る。</p> <p>それぞれの取り組みについて協議会内で共有し、ストーリーを伝える仕組みづくりに生かしていく。</p>
--	---

(7) - 2 戦略立案

(事業番号 2 - A)

事業名	構成町村戦略立案事業		
概要	構成町村の様々な計画に日本遺産に関する事項を盛り込むため、事務局会等を定期的に行い情報共有に努める。協議会内で誘客ターゲットへの情報発信の方法など共通の認識を持って、成果検証を行いながら日本遺産を推進していく。		
	取組名	取組内容	実施主体
①	総合計画、基本計画への記載	各町村の総合計画、基本計画等の中に日本遺産の活用について触れ、自然保護と文化財の保存についての記述を盛り込んでいく。	構成町村
②	戦略立案及び効果の検証	定期的に開催する幹事会において、戦略的に設定した誘客ターゲットへの情報発信などの効果の検証を行い次につなげる。	協議会
③	アンケート調査実施	構成町村での総合計画や戦略などの策定時に行う住民アンケートに、日本遺産に関する調査項目を計上する。 P.5 指標 2-A のアンケート調査内容を補足するため協議会でアンケートの共通フォーマットを策定し、アンケート調査を設計する。実施頻度は現在未定であるが各町村の広報紙等を活用し定期的な調査を実施していく。	構成町村
年度	事業評価指標		(実績値)・目標値
2022	各町村の計画等に日本遺産に関する事項の記載		(8) 8 件
2023			(8) 8 件
2024			(9) 8 件
2025	〃		8 件
2026	〃		8 件
2027	〃		8 件
2028	〃		8 件
2029	〃		8 件
2030	〃		8 件
事業費	2025 年度： 0 2026 年度： 0 2027 年度： 0		
継続に向けた事業設計	各町村で作成する新規計画には日本遺産に関する記載を必ず入れていく。		
事業費	2028 年度： 0 2029 年度： 0 2030 年度： 0		

継続に向けた
事業設計

各町村で作成する新規計画には日本遺産に関する記載を必ず入れていく。

(7) - 3 人材育成

(事業番号3-A)

事業名	人材育成事業		
概要	構成文化財や産業に係わる人材を育成し、日本遺産のストーリーを後世に伝える。		
	取組名	取組内容	実施主体
①	森林塾の開催	日本遺産吉野地域のストーリーの根幹にある林業の担い手確保と移住促進も視野に入れ、人材育成のプログラムとして「森林塾」を開催。自伐型林業に興味のある方を含み講習を行う。林業活性化のため、協議会とも連携し造林発祥の地のストーリーを後世に伝える人材の一人となってもらおう。 2023(4回)、2024(3回)	天川村
②	ネイチャーガイド養成講座	日本遺産を紹介する観光に特化した「ネイチャーガイド養成講座」を開催し、ガイドになるべき人材の育成を行っている。2024年から年3回実施。	天川村
③	吉野杉伐採ツアー(ストーリーの伝承)	吉野杉を使用して住宅を建てたい個人や事業者に向けて吉野杉の伐採を見学するツアーを行い、吉野杉の歴史や文化、水源地の森の保全等について伝える活動を行っている。	(一社)吉野かわかみ社中
④	日本遺産情報発信施設担当者研修会	構成町村において日本遺産の情報発信の拠点となる施設に従事するものについて、日本遺産の価値を伝えるための研修会を行う。 来訪者に町村の枠組みにとらわれず他の町村の構成文化財への訪問を促すことが出来るよう人材育成に努めていく。	構成町村情報発信施設担当者
⑤	SNS担当者研修	これまで共通の認識のもとに情報発信を行うため、各町村で担当者を決め発信体制を整備してきた。今後も継続して担当者のスキルアップを図る。	協議会 民間団体
⑥	吉野林業の勉強会	奈良県フォレスターアカデミーの学生に村産の吉野杉・吉野檜を扱っている村内事業者の視察を行った 2023年に10人 地域在住の特任教授を設置しひよしガレッジ四郷という任意団体を創立	東吉野村

		その活動の一環で特任教授と奈良県フォレストラー、林業関係者とともに山の現状について考える大人の学習会を定期的を開催する	
⑦	ボランティアガイド定例会	下市町観光ボランティアガイドでは定期的にガイドメンバーと職員で定例会を開催。日本遺産の構成文化財である寺社の紹介や体験ガイドなども実施していく	下市町
⑧	地域おこし協力隊の採用	吉野林業の持続的発展には担い手の確保と育成が不可欠であるが人材不足である。地域おこし協力隊を積極的に募集・採用を行い、吉野林業だけでなく担い手の育成をめざす。	構成町村
年度	事業評価指標		(実績値)・目標値
2022	①人材育成のための講座開催回数		(10回) 20回
2023			(14回) 22回
2024			(15回) 24回
2025		〃	20
2026		〃	20
2027		〃	20
2028		〃	20
2029		〃	20
2030		〃	20
事業費	2025年度： 0 2026年度： 0 2027年度： 0		
継続に向けた事業設計	<p>構成町村において観光ガイドの育成に力を入れている。吉野ビジターズビューローが地域プロデューサーの役割を担いつつ、構成町村でも情報発信施設の担当者等が日本遺産吉野を広域的にプロデュースできる人材を育成し連携体制を整える。また、吉野ビジターズビューローで補うことが出来ない部分については外部からの有識者を入れるなどしてカバーをしていく。</p> <p>SNS やデジタルマーケティングなど情報発信の事業については担当者のスキルアップに努め、新しいHP をうまく活用して地域経済を活性化させていく。</p>		
事業費	2028年度：0 2029年度：0 2030年度：0		
継続に向けた事業設計	<p>構成町村において観光ガイドの育成に力を入れている。吉野ビジターズビューローが地域プロデューサーの役割を担いつつ、構成町村でも情報発信施設の担当者等が日本遺産吉野を広域的にプロデュースできる人</p>		

材を育成し連携体制を整える。将来的には構成町村に副プロデューサーが存在し、吉野ビジュアルビューローがそれを集約する形にしていく。

(事業番号 3-B)

事業名	構成文化財継承者支援事業		
概要	構成資産を後世に継承していくため、後継者問題に積極的に取り組む		
	取組名	取組内容	実施主体
①	後継者育成支援事業	日本遺産構成資産に関する技術・技法を継承する人材の育成、確保を行うために文化財保護審議会にて認定を受けた者について奨励金を支給している。 対象：柿の葉寿司、手漉き和紙、吉野葛など。	吉野町
②	割箸製造者、和紙製造者、三宝製造技術者への支援事業	構成町村で生産されている割箸については、産業として製造技術の継承、製造者の確保などの課題を解決する手段として、補助金を交付し支援を行っているほか、後継者問題に対するアンケート調査の実施や地域おこし協力隊による後継者育成などの取り組みも進めている。 また、和紙製造技術、三宝製造技術に対しても組合活動を支援し、後継者育成に努めている。 産業振興及び活性化等を目的とする団体を育成するため、その事業に要する経費について、予算の範囲内において補助金を交付する。 ■実績：2022年 下市製箸協同組合：7万円 ■実績：2023年・2024年 大和三宝工業協同組合：15万円 下市製箸協同組合：7万円 吉野杉箸商工業協同組合：100万円 →イベント参加者や来庁者へ商品の説明と共にプレゼントをし、三宝や割箸の魅力発信・販路拡大に繋げた。 ■2025年以降の目標 より多くのイベントに参加し、三宝や割箸の魅力を発信することで、販路拡大や伝統	吉野町 下市町

		工芸の製造に携わる方を増やしていく。	
③	森林資源の保全と担い手育成事業	林業従事者の人手不足が深刻化する中、構成町村では地域おこし協力隊の採用や森林塾の開催、伐採ツアーの実施などを行う。 また、奈良県フォレスターアカデミーによる林業従事者の育成など関係機関と連携しながら構成文化財の後継者育成に積極的に取り組む。	構成町村
年度	事業評価指標		(実績値)・目標値
2022	構成文化財を継承する人材の 支援者数		(9回) 10人
2023			(7回) 14人
2024			(6回) 15人
2025	〃		10人
2026	〃		10人
2027	〃		10人
2028	〃		10人
2029	〃		10人
2030	〃		10人
事業費	2025年度： 3,645千円 2026年度：3,645千円 2027年度：3,645千円		
継続に向けた事業設計	日本遺産を構成する事業を営む後継者不足が深刻化する中で、奨励金の支給や組合活動の支援を行うことで構成文化財の技術・技法を持つものが途絶えることの無いよう継続して支援していく。		
事業費	2028年度：3,645千円 2029年度：3,645千円 2030年度：3,645千円		
継続に向けた事業設計	日本遺産を構成する事業を営む後継者不足が深刻化する中で、奨励金の支給や組合活動の支援を行うことで構成文化財の技術・技法を持つものが途絶えることの無いよう継続して支援していく。		

(7) - 4 整備

(事業番号 4 - A)

事業名	来訪者の滞在環境整備		
概要	来訪者に日本遺産のストーリーをより快適に感じてもらうため、受け入れ環境整備を行う。		
	取組名	取組内容	実施主体
①	域内移動手段の確保	<p>(天川村)</p> <p>R8 年度以降に村内の渋滞緩和対策としてレンタサイクルの導入を行う。</p> <p>(吉野町)</p> <p>域内の二次交通確保のため、レンタルサイクルを導入。</p> <ul style="list-style-type: none">・日本遺産構成文化財等をめぐる移動そのものを体験価値と捉え、二次交通手段が不足する吉野町において、移動そのものを体験価値と捉え、令和 4 年度に観光庁の支援を受け、E-bike を大和上市駅前観光案内所に 11 台導入。E-bike を活用したツアー造成を同時着手している。・令和 5 年度、稼働率向上及び国栖地区の観光周遊促進のため、国栖の里観光協会と連携し、大和上市観光案内所から 3 台を移設。レンタサイクル実施場所を町内 2 拠点に増強。・各拠点の営業時間が限定的であり、利用者から営業時間延長等のニーズもあったため、令和 6 年度、24 時間 365 日稼働できるシェアサイクルの新規導入を検討。・令和 6 年度中に既存 E-bike 2 台をシェアサイクルに移行するとともに、女性や高齢の方でも乗りやすいタイプの E-bike 2 台を新規導入予定。・設置拠点について、大和上市駅前観光案内所、国栖の里観光協会に加えて、新たに吉野駅に設置し、観光来訪者の多い鉄道駅からの移動手段の確保を図る。 <p>(下市町)</p> <p>令和 5 年度よりレンタサイクルの電動自転車を導入 (6 台) や奈良交通路線バスに乗車券の交付事業を開始し町内の各施設にバス券売機を設置し周遊しやすくしや</p>	天川村・吉野町・下市町・黒滝村・下北山村・上北山村

		<p>すい仕組みを整えているため利用者の増加をめざす。</p> <p>(上北山村) ホテルフォレストかみきたでレンタサイクルの貸し出し(4台) 奈良交通の接続便としてコミュニティバスを無償で運行 (下北山村) R5年度より電動自転車を5台導入</p>	
②	みたらい溪谷への遊歩道整備	近年増加する観光客の安全性の性を確保するため、構成文化財であるみたらい溪谷の遊歩道を整備する。	天川村
③	複合型商業施設の整備(KITO)	<p>2024年7月オープン。</p> <p>ショップ、カフェレストラン、キッズスペース、マルシェなどを備えた廃校の小学校を活用をした複合型体験施設「KITO FOREST MARKET SHIMOICHI」。マルシェでは割箸、三宝、柿の葉寿司といった日本遺産に登録されている商品を販売している。また、体験スペースでは柿の葉寿司作り体験、割箸作り体験、三宝制作体験を実施している。</p> <p>県内外からの多くの来場者に日本遺産の製品に触れる機会を提供している。</p>	下市町
④	臨時駐車場の運行	洞川地区では夏季に大渋滞がおきるため地元と行政にて交通対策会議を実施し臨時駐車場の運行を実施。	天川村
⑤	吉野町内の看板整備	吉野町内のトイレや多言語看板などの施設整備を行い観光客の受入環境を整える。	吉野町
年度	事業評価指標		実績値・目標値
2022	①レンタサイクルの利用人数		①19/人 2月、3月のみ
2023	①レンタサイクルの利用人数		①174/人
2024	①レンタサイクルの利用人数		①165/人
2025	①レンタサイクルの利用人数		①200/人
2026	〃		①200/人
2027	〃		①200/人
2028	〃		①200/人
2029	〃		①200/人

2030	〃	①200/人
事業費	2025年度：15,000千円 2026年度：1,5000千円 2027年度：3,000千円	
継続に向けた事業設計	<p>【レンタサイクル、シェアサイクルに係る計画】</p> <p>吉野町において今後、鉄道駅及び各観光拠点の移動利便性をさらに高めるため、シェアサイクルを拡大していく方針である。吉野地域では鉄道が吉野町までしか来ておらず、南部地域への移動手段がマイカーのみであったがこれにより行動範囲も広がることとなる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・令和7年度に、鉄道事業者と連携してシェアサイクル貸出・返却拠点の増設を検討している。 <p>また、吉野ビクターズビューローでは、E-bike を活用したツアーを造成し、令和5年度からトリップアドバイザー等のOTAで販売を開始している。ツアー販売により、一層の利用促進を図ることで、二次交通手段としてレンタサイクル、シェアサイクルを維持、拡大していく方針。</p> <p>下市町にオープンしたKITOでは日本遺産吉野に関する商品や体験ブースなどが整備され今後の拠点として重要な役目となる。</p> <p>ワークショップ等を頻繁に行い、ストーリーの情報発信施設としての役割を担っていく。</p>	
事業費	2028年度：3,000千円 2029年度：3,000千円 2030年度：3,000千円	
継続に向けた事業設計	<p>天川村地域として駐車場のキャパシティを増やすことでマイカーでの受け入れ人数の増加を増やし、域内の消費喚起につなげる。</p> <p>【レンタサイクル、シェアサイクルに係る計画】</p> <p>吉野町において今後、鉄道駅及び各観光拠点の移動利便性をさらに高めるため、シェアサイクルを拡大していく方針である。吉野地域では鉄道が吉野町までしか来ておらず、南部地域への移動手段がマイカーのみであったがこれにより行動範囲も広がることとなる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・令和7年度に、鉄道事業者と連携してシェアサイクル貸出・返却拠点の増設を検討している。 <p>また、吉野ビクターズビューローでは、E-bike を活用したツアーを造成し、令和5年度からトリップアドバイザー等のOTAで販売を開始している。ツアー販売により、一層の利用促進を図ることで、二次交通手段としてレンタサイクル、シェアサイクルを維持、拡大していく方針。</p> <p>下市町にオープンしたKITOでは日本遺産吉野に関する商品や体験ブースなどが整備され今後の拠点として重要な役目となる。</p> <p>ワークショップ等を頻繁に行い、ストーリーの情報発信施設としての役割を担っていく。</p>	

(事業番号4-B)

事業名	ストーリー維持のための里山の景観保全事業		
概要	本協議会の構成文化財の多くは、先代より守り続けてきた山々の景観・風景にまつわるストーリーであり山林の整備がストーリーの維持に直結する。そのため、里山の維持管理に関する事業を積極的に行っていく。		
	取組内容	取組内容	実施主体
①	桜(山林)の保全に関する費用	地域の人々が守り続けてきた山の整備費用として(公財)保勝会に負担金を拠出し景観・風景の維持管理委託を依頼する。 委託者:交通・環境対策協議会・吉野町	吉野町
②	吉野万葉整備	吉野の木を吉野川に浮かべて運ぶ様子を詠んだ歌が、『万葉集』に載っている。理由は日本遺産の構成文化財である「吉野川の開削跡」の近くに吉野宮跡(国史跡・宮滝遺跡)があったためである。この遺跡を、川や『万葉集』の景色が楽しめる遺跡公園として整備する。 企業版ふるさと納税を活用し、予算の確保をめざす。	吉野町
③	キハダ保全事業	構成文化財である陀羅尼助の原料であるキハダ(陀羅尼助の原料)を守るための取り組みを継続して行っていく。 令和3年度に坂本龍一氏が主となり行っている「みらい基金事業」により、靴メーカーのUGG、VISAカードが参加し、奈良県有林跡地に陀羅尼助丸の原料であるキハダの植樹を行い、日本遺産の原材料を守り利用する活動を行っている。 R8年度よりキハダの植樹ツアーを実施予定であり、日本遺産の啓発も組み込んでいく	天川村
④	吉野の天然林と人工林の景観保全	構成文化財である「吉野の天然林と人工林」は、春の桜と秋の紅葉時に多くの観光客が訪れる観光スポットである。近年はその美しさからオーバーツーリズムの状態となっており、地域全体でゴミや不法投棄をしないよう注意喚起を行い、この美しい自然景観を保全していく。	上北山村

	自伐型林業の推進	自伐型林業の実施（2016～現在に至るまで）自伐型林業に関わる地域おこし協力隊を募集 2022年4月 合同会社森のび 設立 村と協力しながら自伐型林業を進める 桜の保全に関する活動（～2024） 地域の人々が守り続けてきた桜の整備費として森林組合に負担金を拠出し、剪定等の委託を依頼している。	下北山村
	旧役場庁舎改修	構成文化財である黒滝村旧役場庁舎の塗装などの外観や内観の保護・修復が必要なため改修工事を実施する。 また、館内2階にある年表掲示板を回収する際にQRコードを活用し文化的価値の解説情報を追記。村の歴史背景や文化的意義を次世代へ継承するとともに今後の観光振興につなげる。	黒滝村
年度	事業評価指標		(実績値)・目標値
2022			(3件)/2件
2023	①里山の維持管理に関する業務委託		(3件)/2件
2024			(3件)/2件
2025			5件
2026	〃		5件
2027	〃		5件
2028	〃		5件
2029	〃		5件
2030	〃		5件
事業費	2025年度：56,703千円 2026年度：38,400千円 2027年度：23,000千円		
継続に向けた事業設計	これまで行っていた里山の維持管理についての業務委託について継続して行っていく。 ふるさと納税の使途として自然環境・文化財の保存を計上し、維持管理に必要な財源確保を行っていく。 地元団体の吉野山交通・環境対策協議会の収益から里山の保全についての費用を負担する。		
事業費	2028年度：23,000千円 2029年度：23,000千円 2030年度：23,000千円		
継続に向けた事業設計	これまで行っていた里山の維持管理についての業務委託について継続して行っていく。 ふるさと納税の使途として自然環境・文化財の保存を計上し、維持管理に必要な財源確保を行っていく。 地元団体の吉野山交通・環境対策協議会の収益から里山の保全についての費用を負担する。		

(7) - 5 観光事業化

(事業番号5-A)

事業名	観光促進事業		
概要	吉野ビジターズビューローと協業し、構成文化財を活用したツアー造成を行う。		
	取組名	取組内容	実施主体
①	観光関連商品の開発	旅行業資格を持った地域 DMO 法人である吉野ビジターズビューローにツアーの企画造成等に関することを委託して実施する。日本遺産吉野地域の人々の暮らしとところが生み出してきた営みのある風景を守り、伝えていくため、都市部の自治体と連携し、森林環境譲与税を活用した森林体験ツアー等の受入体制を整える。	吉野町
②	体験プランの造成	日本遺産の文化を肌で感じてもらうための体験プランの造成を引続き推進していく。勤行体験、柿の葉寿司づくり体験、一日巫女体験など。 令和6年までの取組で一定数のプランが出来たが OTA への登録や販売についての課題も見つかっている。特にプランはあるが、売り方が解らない、代わりに販売してくれる事業者がいないなどが課題である。登録や広報については引続き協議会がサポートを行ないながら、ストーリーを伝えるコンテンツを販売するために、外部の民間企業とマッチングしながらツアー化するなど、販売に注力していく。	地元事業者
③	プレミアム文化観光ツアーの造成	一般財団法人関西観光本部と連携して、今後回復が見込まれる海外富裕層向けの高付加価値ツアーの企画・造成・販売を行う。日本遺産の構成文化財（修験道、手すき和紙、吉野杉など）に関連した、通常では体験できない、または立ち入ることが出来ない特別プログラムを造成し、海外富裕層の SIT 層や ET 層に向けたテーラーメイド商品として販売展開する。 世界遺産登録 20 周年と連携して能を開催。	吉野ビジターズビューロー

④	旅行業 2 種の取得	川上村にあるかわかみ源流ツーリズムでは、国内旅行の販売や募集型ツアーの企画・販売を行うため旅行業 2 種の取得を目指し日本遺産に関連するツアーの販売も行っていく。	川上村
年度	事業評価指標		実績値・目標値
2022	日本遺産構成文化財を活かしたツアー造成数		(7 回) 12
2023			(13 回) 15
2024			(4 回) 20
2025	①日本遺産構成文化財を活かしたツアー実施回数		①70 回
2026	〃		①70 回
2027	〃		①70 回
2028	〃		①70 回
2029	〃		①70 回
2030	〃		①70 回
事業費		2025 年度：24,000 千円 2026 年度：24,000 千円 2027 年度：24,000 千円	
継続に向けた事業設計		<p>吉野ビジターズビューローでは、旅行商品や体験プランの造成、販売を行っており、OTA 等とも連携を図ることで旅行商品の流通販売を促進している。また、地元事業者においても、飲食や土産物販売以外に体験プランを造成・販売することで、新たな観光消費を創出することが可能となる。協議会としては、造成した体験プランの販売促進に寄与するため、地域のブランディング、情報発信等に努める。</p> <p>これまで、シリアル型で構成されるため地域によってコンテンツの数にばらつきがあった。これまでの取組で一定数のコンテンツが造成された。</p> <p>今後はこのコンテンツを販売していくために民間企業等と協業しながらツアー催行などで地域経済を活性化させていく。マッチング相談会に参加し、コンテンツ販売の課題を多くの企業にプレゼンしてことにより複数の企業が本地域に興味を示している。</p> <p>令和 7 年度以降でコンテンツを生かしたツアー等を行なう予定である。新規だけでなく、これまでに多く作ったツアーを継続して実施しているため令和 7 年度以降は造成数では無く実施回数を指標とする。</p>	
事業費		2028 年度：24,000 千円 2029 年度：24,000 千円 2030 年度：24,000 千円	
継続に向けた事業設計		<p>吉野ビジターズビューローでは、旅行商品や体験プランの造成、販売を行っており、OTA 等とも連携を図ることで旅行商品の流通販売を促進している。また、地元事業者においても、飲食や土産物販売以外に体験プランを造成・販売することで、新たな観光消費を創出することが可能となる。協議会としては、造成した体験プランの販売促進に寄与するため、地域のブランディング、情報発信等に努める。</p> <p>これまで、シリアル型で構成されるため地域によってコンテンツの数にばらつきがあった。これまでの取組で一定数のコンテンツが造成され</p>	

	<p>た。</p> <p>今後はこのコンテンツを販売していくために民間企業等と協業しながらツアー催行などで地域経済を活性化させていく。マッチング相談会に参加し、コンテンツ販売の課題を多くの企業にプレゼンしてことにより複数の企業が本地域に興味を示している。</p> <p>令和7年度以降でコンテンツを生かしたツアー等を行なう予定である。新規だけで無く、これまでに多く作ったツアーを継続して実施しているため令和7年度以降は造成数では無く実施回数を指標とする。</p>
--	---

(7) - 6 普及啓発			
(事業番号6-A)			
事業名	教育事業		
概要	地域内のこども園・小学校・中学校に対して日本遺産を活用した地域教育を実施		
	取組名	取組内容	実施主体
①	ふるさと教育の推進	各学校のふるさと教育に日本遺産を利用してもらう。吉野郡の社会科研究会や各学校と連携して行う。	構成町村
②	木育活動	年代別に吉野林業に触れてもらい郷土愛醸成を図る。(木に触れ愛着や誇りを感じる)	地域内教育機関
③	黒滝白きゅうりの種配布	構成文化財に認定されている白きゅうりの種を希望者へ配布し村民への普及啓発を図る	黒滝村
年度	事業評価指標		実績値・目標値
2022	県民アンケート調査において、構成地域である「地域5(奈良県南東部)」における【自分が住んでいる地域に活気があり、魅力のある地域になっていること】の満足度評価について、5段階評価で3以上の評価をする方の割合を2024年までに65%まで引き上げる。		(48%) 55%
2023			(56%) 60%
2024			(計測不能) 65%
2025	①2024年県民アンケートより調査項目が変更されたため、前述の質問が削除された。そのため、指標を変更し、県民アンケート調査において【将来的に奈良県にずっと住みたいまたは戻って済みたい理由が世界遺産や文化財などが多く歴史的な雰囲気を感じるから】を選択した人の割合とし、2030年までに割合を50%まで引き上げる。		①35%
2026	"		40%

2027	〃	40%
2028	〃	50%
2029	〃	50%
2030	〃	50%
事業費	2025年度： 0 2026年度： 0 2027年度： 0	
継続に向けた事業設計	本協議会のストーリーにあるように、森と人々の暮らしを伝える取組として木育活動も積極的に行っている。初めて生まれた子どもに木のおもちゃをプレゼントする取組や、こども園の遊具に吉野杉を使うなど、各町村ともに木と触れ合う機会を大切に教育活動を行っている。子どもたちが成長した際に日本遺産のストーリーを伝える仕組みや、地域の文化を伝える仕組として人材育成を図ることが継続的な運営につながると考えている。	
事業費	2028年度： 0 2029年度： 0 2030年度： 0	
継続に向けた事業設計	本協議会のストーリーにあるように、森と人々の暮らしを伝える取組として木育活動も積極的に行っている。初めて生まれた子どもに木のおもちゃをプレゼントする取組や、こども園の遊具に吉野杉を使うなど、各町村ともに木と触れ合う機会を大切に教育活動を行っている。子どもたちが成長した際に日本遺産のストーリーを伝える仕組みや、地域の文化を伝える仕組として人材育成を図ることが継続的な運営につながると考えている。	

(事業番号6-B)

事業名	教育旅行・企業研修の誘致		
概要	次世代に日本遺産のストーリーを伝えるべく、教育旅行の誘致や企業研修を積極的に行なっていく。		
	取組名	取組内容	実施主体
①	教育旅行の誘致	2023年に包括連携協定を締結している奈良女子大学附属小学校の5年生の受入れ 内容：1泊2日で下市町の文化や自然に触れる体験の提供。2クラス計65名の受入れ。山に入って木を切る体験、木の製材所の見学、柿の葉寿司作り体験、割箸作り体験を実施。事前学習において町の文化等について説明をし、合宿実施後においても合宿の振り返りを実施し、割箸職人の後継者不足などの下市町の課題にも向き合った。	下市町
②	教育旅行の誘致②	・吉野ビクターズビューローでは、県内外からの教育旅行を手配しており、日本遺産構成文化財等を活用した教育旅行は、直近3年間でのべ15校を受け入れている。学校側の要望を聞き取り、具体的なコンテン	吉野ビクターズビューロー

		<p>ツとしては、吉野町内での製材所見学、手すき和紙体験、柿の葉寿司づくり体験のほか、川上村森と水の源流館見学等を盛り込んだ内容を提案、実施している。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今後、さらに教育旅行の誘致促進を図るため、令和6年度には、森と共生してきた吉野ならではの森林環境学習プログラム造成に着手。奈良県フォレスターアカデミーと連携した人材育成を開始している。 	
③	企業研修・視察の受入れ	<p>【企業研修・視察の受入】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・吉野ビジターズビューローでは、令和5年度から企業研修プログラムの造成に着手し、修験道、桜、吉野材の3本をテーマとしたプログラムを造成。モニターツアーを実施し、のべ21社30名が参加。 ・令和6年度に販売を開始し、基本プログラムを元に企業ニーズに合わせたオーダーメイド型の企業研修・視察プログラムを受け入れ、のべ4社62名の受入実績となっている。 ・企業研修・視察プログラムの受入にあたっては、吉野町にとどまらず、近隣エリアのコンテンツを組み込み、日本遺産構成町村の強みを活かしたプログラムを提供。具体的には、川上村での林業地視察、下市町の製材所・KITO視察、東吉野村のオフィスキャンプ視察、黒滝村の林業伐採現場視察等、企業側のニーズに合わせた内容を盛り込んでいます。 	吉野ビジターズビューロー
	年度	事業評価指標	実績値・目標値
	2022		4回
	2023	教育旅行・企業研修の実施回数	10回
	2024		6回
	2025	教育旅行・企業研修の実施回数	10回
	2026	〃	10回
	2027	〃	10回
	2028	〃	10回
	2029	〃	10回
	2030		10回
	事業費	2025年度：24,000千円 2026年度：24,000千円 2027年度：24,000千円	

<p>継続に向けた事業設計</p>	<p>【教育旅行に係る計画】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・これまでの教育旅行の受入を継続するとともに、令和6年度から着手した森林環境学習プログラムの販売により新規校の受入拡大を図る。 ・日本遺産吉野ならではの森林環境学習プログラムとして一層磨き上げるとともに、プログラムを提供できる人材や連携事業者の養成、確保を進め、都市部の小学校5年生の野外活動を主なターゲットとして、販路拡大を図る。 <p>【企業研修・視察の受入に係る計画】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・これまでの受入実績をもとに、企業研修・視察プログラムの販路拡大を図っていく方針。 ・具体的には、地元金融機関と連携し、新規企業の開拓を進めるとともに、情報発信素材としてパンフレットを制作し、トップセールス等により誘致を図る。
<p>事業費</p>	<p>2028年度：24,000千円 2029年度：24,000千円 2030年度：24,000千円</p>
<p>継続に向けた事業設計</p>	<p>【教育旅行に係る計画】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・これまでの教育旅行の受入を継続するとともに、令和6年度から着手した森林環境学習プログラムの販売により新規校の受入拡大を図る。 ・日本遺産吉野ならではの森林環境学習プログラムとして一層磨き上げるとともに、プログラムを提供できる人材や連携事業者の養成、確保を進め、都市部の小学校5年生の野外活動を主なターゲットとして、販路拡大を図る。 <p>【企業研修・視察の受入に係る計画】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・これまでの受入実績をもとに、企業研修・視察プログラムの販路拡大を図っていく方針。 ・具体的には、地元金融機関と連携し、新規企業の開拓を進めるとともに、情報発信素材としてパンフレットを制作し、トップセールス等により誘致を図る。

(事業番号6-C)

<p>事業名</p>	<p>ワークショップの開催</p>		
<p>概要</p>	<p>日本遺産にまつわる伝統工芸品の製作体験イベント等でワークショップを開催し、ストーリーを身近に感じてもらい多くの人にPRする。</p>		
	<p>取組名</p>	<p>取組内容</p>	<p>実施主体</p>
<p>①</p>	<p>日本遺産に関する体験イベント</p>	<p>三宝、神酒の口、林業体験、柿の葉寿司等の製作体験イベントを通じて日本遺産を身近に感じてもらうためのワークショップを行なう。特に子ども達が体験できるよう地域主催のイベントと絡めて事業を行なう。</p>	<p>協議会 地域団体</p>

年度	事業評価指標	実績値・目標値
2022	実施回数/参加人数	4回/未集計
2023		19回/557人
2024		22回/527人
2025		20回/600人
2026	〃	20回/600人
2027	〃	20回/600人
2028	〃	20回/600人
2029	〃	20回/600人
2030	〃	20回/600人
事業費	2025年度：0 2026年度：0 2027年度：0	
継続に向けた事業設計	<p>毎年 600 人以上の方に体験してもらうことを目標とし、6 年間で 3600 人の方に体験してもらう。</p> <p>地域の子ども達に地元の伝統産業や日本遺産のストーリーに触れてもらうためには地道な普及活動が必要である。下市町に複合施設が出来たことにより、ワークショップを開催しやすくなったことと、吉野町にも今後にぎわい拠点施設が出来る予定であることからツアー等でも積極的に体験をしてもらえるよう吉野ビズターズビューローや下市町にぎわい創出協議会等と連携して推進していく。</p> <p>ワークショップについては英語での説明文の作成や、ガイドに体験してもらうことで外国人観光客にも対応出来るようにしていく。</p>	
事業費	2028年度：0 2029年度：0 2030年度：0	
継続に向けた事業設計	前半 3 年で整備することで、インバウンド客にも日本遺産のストーリーを伝える仕組みを作っていく。そうすることで、来訪者の満足度向上にも寄与できると考えている。	

(7) - 7 情報編集・発信

(事業番号7-A)

事業名	SNS 情報発信事業		
概要	地域情報発信スキルの向上・デジタルコンテンツを使用した観光客の集客方法の確立		
	取組名	取組内容	実施主体
①	SNS による情報発信	構成されている各町村で担当者を決め Instagram の投稿を行う。 構成文化財などの投稿だけではなく、地域の日常的な活動やフォトジェニックな投稿をするなど工夫を凝らしていく。	吉野地域日本遺産活性化協議会
②	ホームページ再編	現在の HP をよく閲覧する人の属性などを分析してニーズに合ったアップデートを実施する。また、Instagram や民間サイトとの連携により、閲覧数を伸ばしていく。体験コンテンツ紹介、販売ページを新たに作成し他の媒体と連携して効果的な発信を行なう。	吉野地域日本遺産活性化協議会
③	情報発信講習会の開催	デジタルマーケティングを活用したターゲティング。	協議会
④	体験コンテンツ紹介 HP の活用	令和 6 年度に作成している体験コンテンツ紹介、販売用のページ内容を事業者と共に充実させていくことで地域コンテンツの売上 UP を目指す。	協議会 地域事業者
年度	事業評価指標		実績値(下)・目標値(上)
2022	年間ホームページアクセス件数 Instagram フォロワー数		HP50,000 / インスタ 1,200 HP 不明 / インスタ 1,200
2023			HP53,000 / インスタ 1,800 HP35,000 / インスタ 1,500
2024			HP55,000 / インスタ 2,300 HP30,000 / インスタ 1,639
2025	年間ホームページアクセス件数(公式・体験) Instagram フォロワー数		HP40,000 / インスタ 1,800
2026	"		HP40,000 / インスタ 2,000
2027	"		HP40,000 / インスタ 2,200
2028	"		HP40,000 / インスタ 2,400
2029	"		HP40,000 / インスタ 2,600
2030	"		HP40,000 / インスタ 2,800
事業費	2025 年度 : 500 千円 2026 年度 : 500 千円 2027 年度 : 500 千円		

<p>継続に向けた 事業設計</p>	<p>2021年にSNS講習会を実施し、各町村のSNS担当者を決定した。また、ターゲットを絞るためInstagramの投稿内容や投稿する時間、撮影の方法等の取り決めをおこなった。</p> <p>令和4年から各町村で投稿日を取り決め、毎日投稿を行ってきたが担当者の負担が大きいことが課題であり、また、有識者からの指導の中で近年、Instagramの運営方針が変わったことで毎日投稿は効果が低いことから投稿頻度を落とし質を上げることを目的とする。地道な努力を続けることで、確実にフォロワーを増やし適切なタグや有料広告も視野に入れてユーザーに吉野地域の情報を届けていく。インバウンドも意識するため、外国人に人気のあるハッシュタグなどの情報収集なども講師による研修等で担当者が理解出来るようにしていく。</p> <p>また、体験コンテンツの紹介、販売ページが出来たことにより相互にリンクをうまくさせながら露出を増やしていく。</p>
<p>事業費</p>	<p>2028年度：500千円 2029年度：500千円 2030年度：500千円</p>
<p>継続に向けた 事業設計</p>	<p>2021年にSNS講習会を実施し、各町村のSNS担当者を決定した。また、ターゲットを絞るためInstagramの投稿内容や投稿する時間、撮影の方法等の取り決めをおこなった。</p> <p>令和4年から各町村で投稿日を取り決め、毎日投稿を行ってきたが担当者の負担が大きいことが課題であり、また、有識者からの指導の中で近年、Instagramの運営方針が変わったことで毎日投稿は効果が低いことから投稿頻度を落とし質を上げることを目的とする。近年、Instagramの運営方針が変わったことで一気にフォロワーを増やすことが難しくなったが、地道な努力を続けることで、確実にフォロワーを増やし適切なタグや有料広告も視野に入れてユーザーに吉野地域の情報を届けていく。インバウンドも意識するため、外国人に人気のあるハッシュタグなどの情報収集なども講師による研修等で担当者が理解出来るようにしていく。</p> <p>また、体験コンテンツの紹介、販売ページが出来たことにより相互にリンクをうまくさせながら露出を増やしていく。</p>